

# ムールード・フェラウーン『貧者の息子』にみる間主体性 ——テキストの反語性と新たな人間観の提示——

青 柳 悦 子

## 内容

はじめに

1. アルジェリア文学の概観——フェラウーンの位置づけのために
  2. フェラウーンの生涯
  3. 『貧者の息子』のテキストをめぐる諸事情
  4. 反語的テキストとしての『貧者の息子』——カピリアの造型
  5. 『貧者の息子』の提示する間主体的な人間観
- おわりに

## はじめに<sup>1</sup>

アルジェリアの作家ムールード・フェラウーン Mouloud Feraoun<sup>2</sup> (1913-1962) の『貧者の息子』 *Le Fils du pauvre* (1950)<sup>3</sup> は、フランス語圏文学あるいはマグリブ文学の古典作品としての位置づけがすでに定まっている世界文学史上の重要作品である。しかしながらこの作品についてはきわめて偏った見方が広く行きわたっており、テキストのありように真摯に目が向けられてきたとは言えない。何よりも、世界的に知られているのはオリジナルテキストのうちのほぼ3分の1が削除された改訂版であり、多くの読者はその事実気づかないままであるのが現状である。いずれにしろ、日本にはまだ作品全体の翻訳紹介もなされていず<sup>4</sup>、この作家の名を知っている人すら多くはないであろう。

フランス植民地時代に現地民<sup>5</sup>系作家によって書かれたこの作品は、「アルジェリア文学」、とりわけ現在につながるアルジェリア現地民による文学の嚆矢となる。独立後のアルジェリアでは今に至るまで国民文学的な位置づけがなされ、また広くフランス語の読書世界で愛すべき素朴な作品として受け取られてきた。たしかにいかにも難解で謎めいたほかのいくつかのアルジェリア現代文学の著名な作品と比べて、この作品は文体も平易で、内容も誰にも親しみやすい。

しかし本論文ではこの作品がはらんでいる過剰なまでの反語性（アイロニカ

ルな性質、二律背反的なものの併存)に着目し、この作品が一見素朴なその外観のもとにほとんどポストモダンのような価値揺動的な世界観・人間観を提示し、これをもって読者に現代世界を生きるための新たなヴィジョンを提示していることを明らかにしたい。

本論文はこうした見地から、『貧者の息子』を現代においてきわめて示唆的な価値をもつ高度な文学作品として位置づけ直そうとするものである。

## 1. アルジェリア文学の概観——フェラウーンの位置づけのために

アルジェリア文学については日本においてまだ十分な紹介がなされているとは言い難い<sup>6</sup>。ほぼ唯一の例として、2011年に出版された土屋勝彦編『反響する文学』に収められた鶴戸聡による論文「アラブ・フランコフォニーと越境の文学」の前半が比較的詳細な解説をおこなっていて有益ではある<sup>7</sup>。より詳しいアルジェリア文学史の流れの紹介は別の機会にゆずることにして、以下にその概略のみ示しておきたい。

現在アルジェリアの国土となっている地域はもともとこの範囲でのまとまりをもったことがなかった。そもそも「アルジェリア」という地名自体、フランスが、植民地支配(1830-1962)<sup>8</sup>を始めた初期の1839年に、侵略と支配の対象であるモロッコとチュニジアの間に広がる地域をこの名で公式に呼んだことに始まるものである。紀元前の時代、北東部にはヌミディア王国、その西にはマウレタニア王国があったように、古くから近代に至るまで東部と西部とはそれぞれ独自の歴史をもって発展してきたし、さらに特殊な地理的・文化的特性をもつ場として南部には広大な乾燥地帯および砂漠地帯が広がっている。地中海沿岸諸都市もまた、それぞれ海洋貿易を核として、別個の文脈のなかで発展してきた。フランス植民地下ではオラン、アルジェ、コンスタンティヌの三都市を中心に三つの県が置かれていたが、実際にも地方ごとの文化的独立性は高く、現在もそれぞれの地方色はさまざまな風俗・習慣に色濃くあらわれている。

こうした経緯から、この地を統合するような文学は歴史的に存在してこなかった。北東部の町タガステ(現スーク・アフラス)で生まれその近くのヒッポ(現アンナバ)で『告白録』を書いた4世紀のアウグスティヌスや、チュニス生まれで地中海沿岸各地を移動しながら生涯を過ごしたが東部のある山城に籠って壮大な文明史の著作である『歴史序説』を執筆した14世紀のイブン・ハルドゥーンなどの存在を指摘することはできるが、そもそもこの地に根づく

ような目立った文学作品はほとんど生まれてこなかった。この地域に広く住んできたベルベル人<sup>9</sup>の文化伝統が文字言語を重視しないこともその一因であろうし、また7世紀以降少しずつ侵入し拡張をし続けてきたアラブ人が、隣のチュニジアやあるいはモロッコ<sup>10</sup>とは違って、この地には重要な学問拠点となるような中核都市を築かなかったこともその一因であろう。20世紀後半に至っても国民的財産と言えるようなアラビア語表現文学が見当たらず、そのため初等教育（小学校・中学校）の「アラビア語」の教科書には祖国の作家が一人も登場しない、と嘆かれてきたほどである<sup>11</sup>。

アルジェリアにおける文学は植民地時代に始まり今日に至る。中心はフランス語表現による文学活動である。大きく言って、植民地時代の植民者の文学と、植民地時代末期から始まる現地民によるフランス語文学にまず分けることができるだろうが、「現代アルジェリア文学」という場合は通常後者を指し、それはしばしば三つの隆盛期をめやすに区分される。

最初の頂点は現地民の文学作品が初めて現れた1950年代で、これを担ったパイオニアの作家たちが「第一世代」と呼ばれる。その代表作家が本論文で取り上げるムールード・フェラウンでありまさにその最初の小説作品となるのが彼の『貧者の息子』である。それに続いて、彼と同郷のカビリア人であるムールード・マムリー Mouloud Mammeri (1917-1989)<sup>12</sup>、初期三部作で知られる大作家ムハンマド・ディーブ Mohammed Dib (1920-2003)<sup>13</sup>、『ネジュマ』*Nedjma* (1956)<sup>14</sup>で世界的に高い評価を受けているカーテブ・ヤーシーン Kateb Yacine (1929-1989) などが現れる<sup>15</sup>。

第二の隆盛期は独立後から1970-80年代の時期で、独立後の社会の発展と行き詰まりとの葛藤のなかで旺盛な文学活動を展開した「第二世代」の作家たちが輩出した。独立戦争の深い傷とその後の社会矛盾とを厳しく見つめる点に特徴があり、まずアシーア・ジェバル Assia Djebar (1936-)<sup>16</sup>、ラシード・ブージェドラ Rachid Boudjera (1941-)<sup>17</sup>が現れ、次いで70年代に登場した主要な作家たちとしてラシード・ミームニ Rachid Mimouni (1945-1995)<sup>18</sup>、ターハル・ジャーウート Tahar Djaout (1954-1993)<sup>19</sup>、それに続くラーバハ・ベルアムリ Rabah Belamri (1946-1995)<sup>20</sup>などが挙げられる。作品群としては、さらに90年代のテロの時代に現れた、さまざまな立場からの深い問いかけをもつ一連の小説を特記すべきであろう<sup>21</sup>。これをとりあえずは第二期の延長上に位置づけておく。またこの時期にはアラビア語で書く作家たちも現れた<sup>22</sup>。

次の隆盛期が90年代末から今日にかけての「第三世代」の作家たちによる

活動期で、さまざまな新進作家たちによって国内外においてめざましい文学生産がくりひろげられている。枚挙にいとまがないが、日本でも複数の翻訳がある人気作家ヤスミナ・ハドラ Yasmina Khadra (1955-) <sup>23</sup> のほか、ブアレーム・サンサル Boualem Sansal (1949-), レイラ・セッバル Leïla Sebbar (1941-), アブデルカデル・ジェマイ Abdelkader Djemaï (1948-), ニーナ・ブーラウィ Nina Bouraoui (1967-), ムスタファ・ベンフォーディル Mustapha Benfodil (1968-), サリーム・パーシー Salim Bachi (1971-) などの名を挙げておきたい <sup>24</sup>。相対的には少ないがアラビア語による文学生産も質の優れたものが出ており、作家としてはとりわけターハル・ワッタール Tahar Ouettar (1936-2010) と女性作家アフラーム・モスタガーネミー Ahlam Mosteghanemi (1953-) が世界的に高く評価されている。

今日アルジェリアではフランス語を中心に、アラビア語そしてベルベル語でも小説や詩が書かれ、きわめて多くの人が創作活動をおこなっている。二、三作で消えていく書き手が大部分であるものの、人々の文学に対する情熱と執筆への無償の渴望は驚くべきものがあり、また互いによく作品を読み合い、教員ほかの知識人の読書意欲もきわめて高い。21 世紀において世界的にも注目値するこうした活発な文学生産の背景には、この国の社会が抱えるさまざまな困難とともにたえず生み出される新しい表現課題の存在があるが、同時に「アルジェリア文学」の伝統がこれを支え、過去の名作の数々、過去の大作家の試みの一つ一つが新たな世代の心奥に深く刻み込まれていることが痛感される。その「現代アルジェリア文学」の最初の作品が、本論文で論じる『貧者の息子』である。作者であるフェラウーンにとっても処女作であり、現地民が自分のことを描いて果たして「文学」になりうるのか、なぜ「文学」を書かねばならないのか、といった問いを抱えながら書かれた、ある意味で先例のない試みであった。だからこそ、この作品は果敢な挑戦に満ちたまさに先駆的冒険のテキストとなったのだと思われる。

ここでフェラウーンに先行する植民者系作家による文学を若干振り返っておきたい。これは 19 世紀末に始まった。アルジェ生まれの“民衆文学”作家ミュゼット (1862-1930, 本名 Auguste Robinet) がこの土地に生きる「新＝フランス人」カガイユーを主人公に、この地で日常使われているアラビア語を含めた諸言語の語彙を織り交ぜた、口語を写し取ったような文体で、20 編におよぶドタバタ喜劇の物語を連作した <sup>25</sup>。「フランスのフランス人」に対する敵対

的な視線を濃厚に打ち出しながら、しがない風来坊青年を主人公に立て「俺たちは、アルジェリア人だ!」と宣言させる彼の小説群は、植民者系住民に「アルジェリア人」Algériens という新しいアイデンティティを植えつける。独立以前、アルジェリアはフランスの内務省の管轄下にあり、「植民地」ではあるが「国内」でもある位置づけであった。ヨーロッパ系住民には自動的にフランス市民権が与えられ、彼らはフランス人であると同時に、とりわけ二世世代以降、本国のフランス人とは明らかに異なる自己像を形成し始める。『植民者たち』*Les Colons* (1907) によって作家活動を始め、ある程度は現地民をも視野に入れてアルジェリアで暮らす人々を描くことを課題としたロペール・ランドー Robert Randau (1873-1946) は、その題名もまさに『アルジェリアニストたち』*Les Algérianistes* (1911) と冠した小説で、「アルジェリアのフランス人」たちが多言語・多文化・多民族的な状況の中で現地主義的な発想に拠ってアイデンティティを打ち立てようとする姿を描きだした。

アルジェを中心に展開されたこうした流れの延長上に、さらに次の世代の作家たちが現れる。それが自らも作家であったエドモン・シャルロ Edmond Charlot (1915-2004) の設立した出版社に寄る「アルジェ派」*École d'Alger* と呼ばれる面々である。アルジェ派はとりわけ 1920 年代から始まる美術の領域での潮流として有名だが、1930 年代後半から旺盛な活動を展開した若手文学者たちのグループを指す呼称として今では定着している。ガブリエル・オーディジオ Gabriel Audisio (1900-1978) やジュール・ロワ Jules Roy (1907-2000)<sup>26</sup>、エマニュエル・ロブレス Emmanuel Roblès (1914-1995)<sup>27</sup> そしてアルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960) などがその中心的な作家として挙げられる。これらの作家たちの多くはアルジェリア独立直前まで、報道、評論といった分野も含め、詩や演劇や小説などの文学的活動をこの地で展開した。

1940-50 年代のこうした運動において注目されるのは、この時期には現地民のなかからも教養を積んだ優秀なフランス語の使い手たる知識人が輩出してきたことであり、そうしたエリート文化人に対してヨーロッパ系の知識人が同胞としての意識を持ち、特段、現地民を排除するような動きは感じられないことである。シャルロはカビリア人詩人ジャン・アムルーシュやその妹のタオス・アムルーシュの作品<sup>28</sup> を出版していたし、後に述べるようにフェラウーンの『貧者の息子』の販売も手掛けた。美術方面で活躍する現地民芸術家の後押しもしていた。ロブレスとフェラウーンが高等師範学校の学友であったように、植民

者系知識人と現地民系の知識人は（限られたエリート知識層の、しかも左翼的自由人の間のこととは言えるが）友人として、あるいは互いに刺激し合う仲間として、連帯関係でつながり合う側面が皆無ではなかったことは否定できないだろう。むろん出自と立場の違いは厳然として存在し、それは植民地支配の矛盾が鮮明となってくるにしたがって無視し得ないものになるし、1954年に独立闘争が始まってからは両者は否応なく対立する陣営に与することになる。

しかしながらフェラウーンの文学が一方では、こうした植民者系の人々によってこの地で展開されてきた文学活動と無縁でないことも忘れてはならないだろう。クリスチアーヌ・アシュールの研究が明らかにしたように、フェラウーンの作品が植民者側の言説に対してある種の修正をもたらすものとして書かれたことは確かであろうが<sup>29</sup>、植民者に対する全面的な対抗意識を動機として文学創作が行われたわけではない。そしてミュゼットに始まるように、貧しい庶民の立場に身を置き、新しい存在である自分たちの姿をありのままに見つめ、それをしっかりと肯定することによって、たとえ「高級」なもの（ないしは「大文学」）ではないとしても、これまでのフランス文学の伝統にはなかった新たな文学創出をおこなっていかうとする、このアルジェリアの地で続けられてきた試みを、フェラウーンはまぎれもなく受け継いでいると言えるのではないだろうか。むろんフェラウーンの作品は、それまでの植民者系の「アルジェリア文学」作品と直接的には似てはいない。また彼の作品に影響を与えたのは、むしろ古典から現代に至るフランス文学の膨大な蓄積と、彼がフランス語を通して吸収することのできた世界の文学遺産の全体であるということもできよう<sup>30</sup>。

以上のようにフェラウーンをアルジェリアの地で半世紀以来展開されてきた文学運動との連続性のなかに見ることも、またそれとの断絶のなかに見ることも、どちらもが重要であることを指摘しておきたい。

## 2. フェラウーンの生涯

### 1) 人生

フェラウーンは有名作家であるが、いまだ伝記的事実については曖昧な点が多い。伝記的研究書として通常まっ先に挙げられるジャック・グレーズの著作<sup>31</sup>の内容のほとんどは、フェラウーンの小説の記述を利用して彼の「人生」を再構成したものであり、事実と虚構とが区別されていない点で信用することができない。フェラウーンの人生を知るには出版された彼の日記や手紙を参照する



以外には、彼の作品や彼の文学をめぐる研究書の出版の際に付された伝記情報や辞書の記述<sup>32</sup>に頼るしかないという状況であり、それらのあいだには食い違いも散見されるし、欠落している情報も多い。そこで以下に、現状で知られている事柄をまとめてみよう。

ムールード・フェラウーンは1913年に、カピリア地方山岳地帯（ジュルジュラ Djurdjura 山中）の人口2000人ほどの小村ティズィ・ヒベル Tizi Hibel に非常に貧しい農民の子として生まれる。村はティズィ・ウズ Tizi Ouzou 地方<sup>33</sup>のベニ・ドゥラ Beni Doula 地域<sup>34</sup>内にあり、当時はフォール・ナショナル Fort National と呼ばれていた中心都市ティズィ・ウズから南方へ20 km程度のところに位置する。両親は8人の子をもうけたが生き残ったのは5人。フェラウーンには姉が3人そして弟が1人いた。なおこうした伝記的詳細をみずから語った手紙<sup>35</sup>のなかで、フェラウーンは自分の名字は「言うまでもないことだがフェラウーンではない」と伝えている。「フェラウーン」という家名はフランスによる植民地支配の一環としておこなわれた19世紀末の住民登録の際に押し付けられたアラブ風の名前という。彼の家族は代々アイト・シャバーヌ Aït Chabaâne というカピリアの呼び方で家名を名乗ってきた。なお、彼はこの名への愛着が深くあり、『貧者の息子』のなかでは、理由は不明だがとしながら主人公の父と叔父が「シャバーヌの息子たち」と呼ばれていた、としている。また同じ手紙の中で、自分の誕生日は公式には3月8日であるが、実際には『貧者の息子』の主人公と同じく2月生まれであったことを記している。

7歳から村の小学校で学ぶ。フェラウーンは大変に優秀な生徒であったようだ。作家ターハル・ジャーウートがフェラウーンについて敬愛を込めて記した文章のなかで、フェラウーンの小学校時代の友人の話が紹介されている。「彼は大変気立てのよい、おとなしい子供で、休み時間にすら絶対に遊ばなかった。季節を問わず、一年中裸足だった。成績はいつも一番で主席の座を降りたことがない。優秀でなかったのは図画だけ。私は彼が絵を描くのを手伝い、彼は算数を助けてくれた。やせっぽちで顔色もよくなかったが、抜群に勉強ができて、先生は彼に質問を当てるのをわざと避けたぐらいだ」<sup>36</sup>。

初等教育課程（C.E.P.）を1925年に終えた後、奨学生試験に合格して<sup>37</sup>1928年からティズィ・ウズの高等小学校<sup>38</sup>に通う。1931年にその修了資格を獲得し、エリート教員養成機関であるアルジェの高等師範学校<sup>39</sup>への入学をめざして試験勉強を始める<sup>40</sup>。翌1932年に高等師範学校に進む。入学時の最優秀学生として初年度は「級長」élève-maître を務めた。ここでフランス

人学生とともに学び、生涯を通じて深い親交を結ぶことになるエマニュエル・ロブレス<sup>41</sup>と知り合う。なおアシュールのまとめた簡略な伝記情報によれば、1932年のアルジェの高等師範学校入学試験では、〈原住民部門〉では20名の定員に対して318人の受験者があり、それに対して〈ヨーロッパ人部門〉では54名の定員に対する受験者は64人であったという<sup>42</sup>。

1935年、師範学校を卒業して故郷の小学校の教員となる<sup>43</sup>。同年に<sup>44</sup>、昔からいいなづけとされていた従妹のデフビア Dehbia と結婚する。以後7人の子をもうけた<sup>45</sup>。フェラウーンの勤務地は最初、故郷の村に近いタウリルト・アデン Taourirt Aden。その後もベニ・ドゥラ地域内に赴任し、1937年から45年までは谷あいの村タブドリスト Taboudrist で勤務——ここで処女作『貧者の息子』を執筆する——、さらに1945年から1年間はアイト・アブデルムメン Aït Abdel-Moumen で教鞭をとる。多くは一学校一学級、一人で学校を任される小規模校であった。1946年から6年間はタウリルト・ムサ Taourirt Moussa にあるやや大きな学校に勤務し、教育主任に昇格。フェラウーンは教員生活の傍ら執筆活動を続ける生活を定着させる。なおこの間1949年に、パリへの最初の旅行をしている<sup>46</sup>。

1952年、フォール・ナショナルの補習課程長 directeur du cours complémentaire<sup>47</sup>に任命される。アルジェリア独立運動の活発化が日々に及ぼす影響やこの問題をめぐる彼の省察が手紙や日記によって伝えられている。1957年、アルジェ近郊のクロ＝サランビエ Clos-Salebier にあるナドル Nador 小学校の校長に任命されたため、カビリア地方を離れることになる<sup>48</sup>。

1960年にアルジェリア現地民の教育を促進する「社会教育センター」<sup>49</sup>の委員 inspecteur となる。フェラウーン自身は独立運動を先鋭に展開する闘士ではなかったが、暗殺をほのめかす脅迫状が届くようになる。副センター長を務めていた1962年3月15日午前10時半頃、同センターでおこなわれていた会議中に突入してきたフランス秘密警察 OAS 特殊部隊<sup>コマンドー</sup>によって、センターのほかの5名の委員とともにフェラウーンは中庭に連れ出され、そこで射殺される<sup>50</sup>。49歳であった。アルジェリアを同年7月5日に独立させることを決定したエヴィアン協定が締結されたのはそのわずか3日後、3月18日のことである。

フェラウーンはカビリア人である。アルジェリアにはアラビア語を母語とする人々のほかに、7世紀のアラブ人の侵入以前から北アフリカ地域に住んで



いたベルベル系の人々がいる<sup>51</sup>。アルジェリア内のベルベル人は、居住地域別に大まかに4つのグループに大別される（東部オーレス山地のシャーウィー、アルジェ西方のカビリア地方に住むカビール、南部のムザブ谷に住むベニ・ムザブ、最南部砂漠地帯に暮らすトゥワレグ）。彼らの話す言葉はベルベル語（あるいはタマズィグト〔アマジグ語〕）と総称されるが、各地域によって多少差異がある。ベルベル系の人々は現在アルジェリアの人口（3500万人）の30%以上を占めるといわれるが、そのうちの半分がカビリア人（カビール）である。カビリア人は地域内に留まるだけでなく、アルジェをはじめ地域外の都市に居住する人も多い。

先住者であったベルベル人のうちアラブ人など到来者に同化しなかった人々は長い歴史の中で次第に追いやられて険しい山や谷に残り、地味の乏しい地域で、自分たちの言語と文化を守りながら貧しい生活を送ってきた。カビリア人も、まさにそうした人々である。宗教的にはイスラーム教を受け入れている人が多いが、独立以前にはアラビア語はほとんど住民には浸透していなかった。

一方、フランス植民地時代には、アルジェリア現地民のなかでの少数民族であるカビリア人はフランスによる統治の足掛かりとして格好の懐柔対象と目され、カビリア地方でのフランス語教育が重点化されたり、フランス本国との緊密化が促進されたりした。フランスへの出稼ぎ者も多くそのため意識の開化が進んだ面があるし、また高学歴者や社会的な成功者も多く、カビリア人はアルジェリア国内で政治的・経済的に大きな勢力をなしている。マアムリーの『阿片と鞭』ほかの文学作品でもしばしば題材とされているように、カビリアが独立闘争の重要拠点であり、カビリア人が祖国の独立に大きな役割を果たしたという点も、その後の社会建設におけるカビリア人の影響力と深く関係している。一方でカビリアが貧困地帯だという側面も今なお強い。アルジェリアという国を考えると、アラブ人とは区別されるカビリア人とカビリア地方のことは念頭に置いておく必要がある。そして「アルジェリア文学」を考えると、カビリア人による文学活動がきわめて大きな役割を果たしてきたことを忘れることはできない。ムールード・フェラウンは、まさにその象徴的な存在である。

フェラウンはカビリア語<sup>52</sup>を母語として育ち、7歳から学校で学んだフランス語を第二言語として身につけた二言語使用者である。アラビア語の読み書きはほとんどできなかったという。両親が文字の読み書きができなかったことはフェラウン自身が明かしている<sup>53</sup>。また彼の妻もフランス語を話さない、

カビリア語の単一言語使用者であった。

フェラウーンにとってカビリア語が地域での、また家庭での生活言語として、生涯重要な意味をもつとともに、他方のフランス語は彼の用い得る唯一の書記言語であって、幼い頃から彼にとって知識と思考を支えるただ一つの言語媒体であった。ここには（たとえばカーテブ・ヤーシーン<sup>54</sup>やモロッコのアブデルケービル・ハティビ、あるいはチュニジア出身のアルベール・メンミなどに顕著な）アラビア語話者のフランス語使用の際に強調される二言語間の「引き裂かれ」の問題をそのまま見ることはできない<sup>55</sup>。ある見方からすれば「支配者の言語」であるフランス語を自分の存在にとって、そしてアルジェリア現地民の発展にとっても不可欠な言語として重んじるフェラウーンの姿勢は、民族独立運動や反植民地主義の文脈からすると、安易で無自覚な——あるいは支配者にとってあまりにも好都合な——同化の事例として、不適切なことに思われたり、糾弾すべきこととみなされたりしがちである。実際フェラウーンはそうした批判にさらされてきた。しかし今日の多文化主義の文脈からすれば、フェラウーンに見ることのできる極端な「引き裂かれ」を伴わない多言語使用・他言語使用の例は、多くの示唆を含んでいるように思われる。

## 2) 作家活動

処女作『貧者の息子——メンラッド、カビリアの学校教師』*Le Fils du pauvre; Menrad, instituteur Kabyle*の原稿は1939年春（復活祭の休暇中）、すなわち第二次大戦が勃発する直前に書き始められ、作品本文の末部に記されているように1944年10月にほぼ書き終えられた。フェラウーンが小説のなかで谷間の急斜面に張り付くように建っていると描写したタブドリストの小学校の教師を務めていた期間である。巻末に付された「エピローグ」の終わりには1948年と記され、これが脱稿の年と考えられる。ちなみにこの「エピローグ」の冒頭にエピグラフとして掲げられたカミュの一文「人間の中には軽蔑すべきものよりも賛美すべきものの方が多くある」« Il y a dans les hommes plus de choses à admirer que de choses à mépriser »は、『ペスト』（1947年）から取られたもので、フェラウーンのカミュへの尊敬と、自分が書きあげたものがカミュのヒューマニズムの思想と共鳴するとの思いがここに確認されていると言える。作品はようやく1950年にフランス本土のリヨン近くの町ル・ピュイ Le Puy (Le Puy en Velay) の出版社カイエ・デュ・ヌーヴェル・ユマニスム Cahiers du Nouvel Humanisme 社から出版される<sup>56</sup>。自費出版で、印刷部

数は1000部であったとされる<sup>57</sup>。批評家から好意的に受け入れられ、アルジェ市文学大賞 *Le Grand Prix littéraire de la ville d'Alger* を1950年12月に受賞する。フェラウーンはこの受賞に対する謝辞<sup>58</sup>のなかで自分を、作品のタイトルどおり「貧者の息子」そして「カビリアの学校教師」と呼び、貧しく無学な農民の父親の子が、フランス語教育を受け、田舎の一介の小学校教師ながらこうしてフランス語で小説を書いて栄誉ある賞を授かったことを、感激を込めて語っている。そしてなにより、この栄えある受賞はアルジェリアにおけるフランス教育の成功を証しているとして、この教育制度そのものを褒め称えている。

この受賞によってフェラウーンの文名は一気に上がり、アルジェ派の作家たちの人脈に連なるようになる。翌1951年以降、アルジェリアの文学雑誌(『熱風』 *Simoun*, 『太陽』 *Soleil*, 『テラス』 *Terrasses* など)やフランス本土の雑誌にさまざまな文章を載せるようになる<sup>59</sup>。同じ年齢であったがすでに1942年の『異邦人』によって作家として名を馳せていたアルベール・カミュ(1940年以降主にフランス在住)とは1951年に初めて手紙での接触をもつ<sup>60</sup>。なお、1958年のカミュ宛での公開書簡では、まだ無名のカミュが1939年に『アルジェ・レピュブリカン』紙に掲載した連載記事「カビリアの悲惨」<sup>61</sup>を当時読んで、カビリア地方に対する偏見のない人類愛に満ちた姿勢に感銘を受けたことを伝えている(フェラウーンはすでに教職に就いていた自分が当時おそらくカミュよりも高い収入を得ていたことも言い添えている。すなわち有名になったこの記事の題名どおりにカビリア地方を「悲惨」の語で一括りにすることに対する留保を促していると読むことができる)<sup>62</sup>。一方カミュは『貧者の息子』に高い評価をしていたという。

1951年7月に小説第二作『大地と血』 *La Terre et le sang* を脱稿し、これを1953年に、エマニュエル・ロブレスの手引きでスユ社から刊行する<sup>63</sup>。ロブレスは地中海沿岸とくに北アフリカ地域の若手作家たちを紹介する目的でその2年前にパリのスユ社で「地中海」 *Méditerranée* 叢書を創始していた<sup>64</sup>。彼はこの叢書で、自分の作品も含め、すでにアルジェリア現地民作家ディーブの『大きな家』(1952)などの話題作を出していた。フェラウーンの『大地と血』では、アルジェリア移民のフランスでの出稼ぎの状況が回想シーンのなかで詳しく描かれ、筋の展開としては主人公の移民男性が故郷のカビリアの村へフランス人女性を妻として連れ帰ったことで生じる摩擦が追われている。20世紀に新たに生じた社会問題を切り取ったこの作品は、フランスの文学賞「ポピュ

リスト賞」 Le Prix du roman populiste を受賞した。

こうした評判が後押しをして、すでに初出版が品切れとなり、とりわけフランス本土の読者には入手の機会がほとんどなかった『貧者の息子』は、1954年にスイス社から再刊行されることとなる。だが、ロブレスとスイス社の総帥でもあり文芸部門編集主幹でもあったポール・フラマン Paul Flamand の助言に従い、作品の後半部分を切り落とすことになった。おそらくフランス人読者への受け入れやすさを考えてのことである。こうしてオリジナル版のテキストの後半部分 70 ページほどが削除され、全体は三部構成から二部構成となった。また、この改訂版の最後の部分は元のテキストに比べて大幅な改変が施されており、結末のために新たなエピソードが書かれた。そのほか、削除されなかった部分にも手が加えられテキスト全体にさまざまな変化が生じている。内容的には主人公が高等師範学校の入学試験に向かうところで作品が閉じられ、作品全体が少年の成長物語の観を呈する。したがって副題「メンラッド、カビリアの学校教師」は内容にそぐわないものとなり、消去される。

同じ 1954 年には、カビリア地方の風土や生活情景を描いた散文集『カビリアの日々』 *Jours de Kabylie*<sup>65</sup> を出版、1957 年には、『大地と血』の続編となる小説『上り坂の道』 *Les Chemins qui montent*<sup>66</sup> を刊行する。ほかにカビリアの詩人シ・モハンドの作品をフランス語に訳した翻訳詩集『シ・モハンドの詩』 *Les Poèmes de Si Mohand*<sup>67</sup> を出す。この間アルジェリアやフランス本土の雑誌にこれらの作品の断片を発表するほか、さまざまな論文や記事、随想などを載せている。なかでも文学の分野では 1957 年の論考「アルジェリア文学」<sup>68</sup> が注目される。ここでフェラウーンは、アルジェリアの文学に向けられる偏見のまなざしを鋭く告発し、自負をもってアルジェリア文学の可能性について語っている。また、時事的発言として、アルジェリア戦争が過激化していく中で、アルベール・カミュの人道的姿勢やアルジェリアへの愛には賛意を示しつつも、カミュの主張が現地民についてのさまざまな無理解をはらんでいることやカミュの立場が現実的な有効性を欠く点を厳しく主張した論考群が注目される<sup>69</sup>。ほかに 1961 年 5 月から 6 月にかけてフェラウーンはイタリア、ギリシア、サルディニア島への出張旅行をおこない、とくにギリシアには感銘を受けて旅行記を書いている<sup>70</sup>。この地にアルジェリアと近い風土を見出して、政治的・社会的には混迷状態にあったギリシアに対する親近感を語り、また地中海世界の連帯というこれまでアルジェリアで繰り返し謳われてきた命題をみずから実感した体験についての感慨を綴っている。

アルジェリア戦争勃発後、発表の意図をもって1955年から記していた日記を刊行するべく、フェラウンは1962年2月にはスイユ社に原稿を渡してあったが、暗殺によって生前の出版はならず、死後の刊行となった。その内容は1955年11月1日に始まり、1962年3月14日分までで、とりわけ1956年と1957年の記述が詳細である。この『日記——1955-1962年』*Journal : 1955-1962*<sup>71</sup>は2000年に出版された英訳<sup>72</sup>での副題「フランス＝アルジェリア戦争の省察」が鮮明に示す通り、独立闘争下の状況とこの問題をめぐる考察を現地住民の立場から綿密に記録したものである。

またフェラウンは初等教育のフランス語教科書作りにも精力を注ぎ、4学年分が1962年に刊行された<sup>73</sup>。

ほかにフェラウンは小説を準備していた。『大地と血』『上り坂の道』と合わせて三部作となる予定の作品を、1957年11月から1960年の12月にかけて書き、完成していた。アルジェリア独立戦争のさなか、カビリア出身でアルジェ郊外の町の学校長をしている男性とフランス人女性教師とのあいだに芽生えた道ならぬ恋を主軸にして、アルジェリアとフランスとのあいだの複雑なそしてはや訣別の必然が明白である状況を描き出した作品である。作者は〈記念日〉*L'Anniversaire* というタイトルを予定していた。しかしスイユ社からはそのままの形で出版を拒否され、フェラウンはその後、ヴァリエーションとなる作品を手がける。その結果の一部（冒頭の短い4つの断片）が1972年になって、同名を冠した選文集（『記念日』）に収められてスイユ社から刊行された<sup>74</sup>。未発表のまま残されていた元の作品の全体は、「人々が冷静に作品を受け止めることができるようになる」時期を待って、フェラウンの息子ラシードによる編集作業を経て『薔薇の街』*La Cité des roses* と題され、2007年にアルジェリアで刊行された<sup>75</sup>。作品題名はスイユ社から出されていた断片および選文集との混同を避けるために、編者であるラシードが作品の第1部のタイトルから考案したという<sup>76</sup>。

さらにほかの死後出版物として、1949年から亡くなるまでのフェラウンの手紙を集めた書簡集『友人への手紙』*Lettres à ses amis*<sup>77</sup>がロブレスの編纂によって、1969年に刊行されている。

なお、『貧者の息子』の英訳版<sup>78</sup>に充実した巻頭論文とも呼ぶべき序文を寄せているJames D. Le Sueurによれば、参照することのできた原資料と付き合わせてみると、スイユ社から刊行されている『日記』や『友人への手紙』のテキストには、多くの削除や書き換えがみられるとのことである。フェラウー

ンの著作についてのテキストクリティーク（校訂作業，本文研究）はこれからの研究の大きな課題であるだろう。

また90年代以降、とくに21世紀に入ってから、アルジェリアではフェラウンのテキストの校訂出版が相次いでおこなわれている。他方フランス国内では、出版社としてのスイユ社の絶大な権威からしても、同社から刊行されてきたテキスト群が見直される気配はない。しかしながら研究者にとって重要な参考文献であるこうした新たな校訂版は、アルジェリア国外では非常に入手が困難であるという問題がある。アルジェリアがクレジットカードやインターネット販売が進んでいない国であること、また、ENAG（Entreprise Nationale des Arts Graphiques 国立印刷術社）などの公的性格をもつしっかりとした出版社でさえ、信頼度の高いみずからの出版物を積極的に国外に販売・普及しようという姿勢がないことなどが妨げとなっている。

さらに付言しておく、隣国チュニジアでも同様であるが、出版大国である先進諸国とくらべて新興国では書物の出版がおこなわれてもそれを流通させるシステムが完備していないという問題がある。書店そのものが稀で、大都市に小規模な販売店がいくつかあるだけである。むろん出版された書籍のすべてが書店に並ぶわけではないし、新刊時に書店で販売されても売り切れたあとは補充されることが少なく、注文システムも存在しないために、評判になった本や研究書で関心を惹かれた本があっても実際には購入することが難しいことが多い。本は書店で見た時に手に入れておかないと次にはいつ目にするかわからない、という状況である。市民向けの図書館はほとんど存在せず、大学の図書館でさえ蔵書は貧弱な場合が多い。年に一度開かれる書籍市に足を運ぶことが書籍購入のもっともよい機会であるが、ここでも必ずしも目当ての本に出会えるとは限らない。またアルジェの書籍市の場合、他の都市（オランやコンスタンティーン）の出版社がブースを出していないことが多く、こうした地方出版社の書籍は現地に行かないと手に入らないという状態である。

国内の読者のためにもまた世界の読者のためにも、書籍が常時購入できるようなシステムの構築が切に望まれる。

### 3. 『貧者の息子』のテキストをめぐる諸事情

すでに触れたように『貧者の息子——メンラッド、カビリアの学校教師』は1950年に出版された。「家族」La Famille、「長男」Le Fils aîné、「戦争」La



Guerre の三部構成で（本論文では慣例に倣い、それぞれを便宜的に、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部と呼ぶ）、巻末に「エピローグ」が付されている。内容はカピリア地方で今は小学校の教師をしているカピリア人男性フルル・メンラッド Fouroulou Menrad<sup>79</sup> が、山村の村で育った幼い日々を回想し、さらに彼のその後の人生を、第二次大戦下まで追うものである。文体は簡潔で平易。独特の詩情と人間的に成熟した視点がテキストを覆っている。すでに触れたように、この作品は同年のアルジェ市文学大賞を受賞し、フランス語表現「原住民」作家の誕生が大いに祝された。この受賞は、第Ⅲ部までを含めた元の形でのこの小説が、フランス植民者側にも、いわば問題なく好意的に受け入れられたことを語っている。またこの作品は、多くのアラブ系住民にはよく知られていなかったカピリア人の生活をつぶさに教え、文学作品特有の力によって（無論非常に限られた数とはいえ）アラブ人の読者にカピリア人を身近に感じさせることに貢献したであろう。第Ⅰ部の幼少期のみならず、とりわけ第Ⅲ部の第二次大戦下の状況を書いた部分は、アルジェリアの全ての住民とりわけ現地民（原住民）にとって共通の厳しい経験を映し出しており、この作品を「われわれ」の文学と感じさせるのに役立ったと思われる。

その後 1954 年に後半を割愛し、副題を削除した『貧者の息子』としてスイユ社から出版されることになり、実質的にフランス本土ではこの版によって初めてこの作品が手に取られるようになる。今日に至るまで、世界中の読者が知っている『貧者の息子』のフランス語テキストはこの削除版である。

フェラウンがどのようないきさつでこの削除を受け入れたのか、その詳細は明らかでない。公刊されている資料からは、1953 年の春にスイユ社から再刊行する予定で、原稿の手直しを教務の合間に徹夜までしておこなっていることが読みとれる<sup>80</sup>。手紙からはロブレスがさまざまな訂正を入れたこともわかるが、フェラウンは彼のおこなった修正と自分の修正はほぼぴったり合うと述べている。友人でもあり、作家としてすでに高い地歩を築いていたロブレスに対する厚い信頼が窺われる。またスイユ社の編集責任者であるポール・フラマンへの手紙もいくつか参照できるが、概ね謝辞が述べられているだけであり、『貧者の息子』に大幅な削除を施すことになったことへの不満は見受けられない<sup>81</sup>。

もちろん日記や手紙の編纂にたずさわったロブレスにとって心痛むようなくだりが伏されているということがあり得るが、一介の田舎教師であることをたえず強く認識していたフェラウンが、処女作をフランスの公衆に向けて発表

するに当たり、どのようにテキストを整えるべきか確たる信念をもっていたわけではないことが容易に推察される。1950年に自費出版で書物にした時は、おそらくそれほど強く読者大衆を意識してはいなかったであろう。ほとんどフランス国内では出回らずに終わったと思われる初版に対して、作家として少しずつ歩み始めたフェラウーンの名声を確立するべく評判だけが伝わっている彼の処女小説を改めて世に送り出すにあたって、ロブレスも親身の姿勢でテキストの思いきった改変を薦めたのだと思われる。いわばその善意が、この作品を、アルジェリアの片田舎の貧困地帯に暮らすエキゾチックなカビリア族の民族描写が目を惹き、そこで成長する無邪気な少年の成長がほほえましい「素朴な」物語に仕立てることになった。

フェラウーンがこの削除版のために新しく付した作品末のエピソード<sup>82</sup>は、こうした企図に添って非常に良く書けていると思われる。一生を左右する高等師範学校入学試験を前に、不安で押しつぶされそうな毎日を主人公の青年フルル——19歳だが、まだ少年として表象されているように思われる——は送っている。そしてついに受験のためにアルジェに向かう日、試験中の滞在費をやっと工面してきて手渡す父親が、故郷の山間の村まで彼を載せて行ってくれるトラックが通るのを待ちながら、道路端で息子に話す。どうせ受験生はたくさんいる。失敗したらうちに帰ってくるだけのことさ。ただ母さんにはお前がこわがっていないと言っておくぞ、と。そこで少年は繰り返す。「上」に帰ったら、僕がこわがっていないって言うておいて。

人生の恐怖と闘いながら独りで未知の世界に踏み出していこうとするけなげな少年の姿をあますところなく描くこのシーンは、フェラウーンが『貧者の息子』をこの時点では一種の教養小説＝成長小説に仕立てることに後ろ向きではなかったことを想像させる。

果たして、出版社や友人編集者のねらいどおり、この作品は成功を収め、フェラウーンの名を不動のものにし、このかたちのままで、あるいはこのかたちであったからこそ、マグレブ文学の古典の位置を確たるものにする。誰にでも親しみのもてる愛すべき作品として。あるいは故郷への愛を綴った美しい「地方文学」として。

しかし作家は、もとのテキストがもっていた射程を全くあきらめてしまうことはできなかったらしい。削除した部分を（多少改変しながら）作者の没後10年目に選文集『記念日』に収めて刊行するにあたって編者は補注のなかで、「私は『貧者の息子』の続きを完成させたいと思っている。長生きできればだ

が……」というフェラウーンの手紙（1956年7月17日付）を引用している<sup>83</sup>。この引用に先立って、ロブレスと思われるこの編者は1954年のスイユ版で削除されたくだりについて「フェラウーンはこの部分を、あとで第二の自伝的作品に使うという意図をもってあらかじめ退け置いたのだった」とし、さきの手紙の文面がそうした経緯の痕跡であるとしている。果たしてフェラウーンが第二の自伝作品を書くという意図を元々持っていたのかどうか、それは不明である。ただ削除されたこの部分を、眠らせて置くままにはしたくなかったことだけは事実であろう。そのためにフェラウーンは原稿に手を入れていたという<sup>84</sup>。

フランス（語圏）の読書界では、1954年のスイユ削除版は『貧者の息子』の底本の位置を獲得していく。というよりもスイユ版以外にオリジナル版があったことは一般の読者には忘れ去られていく。スイユ版には初版本との違いについての言及は一切なく、1982年にはそのまま文庫版（colleciton « points »）が出され、一層広い読者に受容されていくことになる。

アルジェリアやほかのマグレブ諸国でもフェラウーンの『貧者の息子』はマグレブ文学の不朽の名作としての位置を固め、以下にも示すように、とりわけ教育界においてきわめて重要な役割を与えられる。小学校から高校までの国民の文学教育のなかに深く位置づけられることによってかえってフェラウーンの作品は、児童・生徒の学習に適した教材の性格を負わされることになったと言えるだろう。そこで定着していくのは、まさにスイユ版が示した成長小説ないし郷土愛のテキストとしての『貧者の息子』であろう<sup>85</sup>。

ここでフェラウーンの文学がアルジェリアの初等・中等教育のなかで絶大な位置を占めていることを押さえておきたい。

マグレブ文学研究の大御所であるシャルル・ボン Charles Bonn が1970年代初めに行った調査によれば、アルジェリアの国定教科書（フランス語教科）に載せられた文学作品の抜粋78編のうち26編がフェラウーンのテキストであったという。すなわち3分の1に及ぶ。アルジェリアの児童・生徒はみなフェラウーンを読みながら成長してきたのである。この意味でフェラウーンはまさに国民作家として定位されてきたと言える

アルジェリア人女性研究者クリスティアーヌ・アシュールの著作『ムールード・フェラウーン——対位法に置かれた声』（1986年）<sup>86</sup>は、フェラウーンの作品が独立後のアルジェリアの中で、いかに国民の教育向きに利用されてきたかを詳細に検討している。これをもとに2006年にアルジェリアで刊行され

た『日記』の巻末に彼女が付した簡潔な資料<sup>87</sup>によると、1965年以来、国立教育院<sup>88</sup>発行の、基礎教育課程初級（小学校に相当）le primaire, 同中級（中学校に相当）le moyen, 高等学校（高校に相当）le secondaire<sup>89</sup>の教科書では、フェラウーンのテキストが次のように採択されているという。

- ・初級3年、4年、5年、6年で、『貧者の息子』『カビリアの日々』『大地と血』『上り坂の道』からさまざまな抜粋<sup>90</sup>。
- ・中級1年で『貧者の息子』『カビリアの日々』『大地と血』から9つの抜粋。
- ・中級2年で四作品から6つの抜粋。
- ・中級3年で『貧者の息子』『大地と血』から4つの抜粋。
- ・中級4年で『カビリアの日々』から1つの抜粋。
- ・高校1年で『大地と血』から1つの抜粋
- ・高校1年〔2年の誤植か〕で、『貧者の息子』『カビリアの日々』『上り坂の道』から5つの抜粋

\*発展読書教材として、中級1年では『貧者の息子』、中級4年では『大地と血』からの抜粋が、高校1年では『貧者の息子』から6つの抜粋が掲載されている。

各作品のどの部分が掲載されているかもアシュールの1986年の著作では簡略に示されているが、それによれば『貧者の息子』に関しては、第Ⅰ部と第Ⅱ部からのみの抜粋であり、これまで示したような版本の普及状態から考えて教科書に掲載されてきたテキストの底本はスイユ版であると考えられる。児童・生徒にとって自分たちと同年代である少年期・青少年期の主人公がカビリアで成長する日々を通して、郷土愛や家族愛、勉学への意欲を育むのに『貧者の息子』が格好の教材とされてきたことがわかる。さらにこの目的のために、本論文で以下に検討するようなこのテキストのはらむ複雑な認識を映し出す記述が教科書では削除され、単純化されてきたこともアシュールは明らかにしている。アルジェリアではフェラウーンは国民作家にまつりあげられることによって、その作品が「文学」として真剣に検討されることなく、国中の児童・生徒の「父」あるいは「先生」としてのフェラウーンのイメージだけが肥大してきたのである。他方フランスおよびフランス語圏地域では、祖国でのこうした傾向とも相まって、フェラウーンの作品はますます、単純素朴なものだという先入見のもとに受容されてきたと言える。

こうした見方を変化させるのに重要な役割を果たすものとして注目されるのが、二つのかたちでおこなわれた、オリジナルテキストの復元刊行である。

一つ目はアルジェリアでなされた、初版にもっとも忠実なかたちでの『貧者の息子——メンラッド、カピリアの学校教師』の刊行である。これはフェラウンの息子アリーが、父親の残した手書き清書原稿をもとにして編纂したもので、アルジェの出版社 ENAG から 2002 年に出された。しかし驚くべきことにこの版が埋もれていた『貧者の息子』の元の形を忠実に再現したものであることはまったく宣伝されていない。実際に手にとっても書物の中のどこにも校訂の経緯や底本とした原稿のこと、世界普及版であるスイユ社刊行のテキストとの違いについての説明がないのである。外表紙はただ『貧者の息子』とあるだけで、完全版であることを明示する指標となる副題は内扉のなかにしか現れない。そしていきなり本文に入ってしまう、テキストについて説明する編者の序文も付されていないければ、裏表紙の作家や作品内容の紹介文でも何の言及もない。しかも、すでに ENAG 社からは 1995 年にスイユ版と同じ内容で、クリスチアヌ・(ショーレ＝) アシュールの序文を付しただけの『貧者の息子』が刊行されている。かくして、画期的なオリジナル忠実版である 2002 年 ENAG 版の価値はほとんど秘匿され、その存在すら知られないままに終わっている。しかも、専門研究者が研究書を通じてその存在を知ったとしても、ENAG 版はアルジェリア国外ではきわめて入手が難しい。このことも世界の多くの研究者が、結局のところ『貧者の息子』をスイユ社の短縮版をもとに(せいぜい『記念日』に収録された削除部分を補足資料として参考にして)研究するに終わる状態を継続させている。

もう一つのオリジナルテキストの復元刊行は、英語訳によってなされた。2005 年に James D. Le Sueur の長大な序文を付してアメリカで刊行された Lucy R. McNair による英語翻訳版 (*The Poor Man's Son: Menrad, Kabyle Schoolteacher*, University of Virginia Press) は 1950 年の初出版に基づいたもので、こちらは大大に、この英語版こそがこれまで世界が知らなかった『貧者の息子』の本当の姿を明かすものであることを喧伝している。インターネットの広告にもまずこのことが宣伝文句として目に入るようになっており、スイユ社から出ている『貧者の息子』が初出本の短縮版であることを英訳によって初めて知ったという読者・研究者も多いことと思われる。なおこの英訳版では、今日もなおフランス語読者は『貧者の息子』の真の姿に触れることができない

としている。すなわち、アルジェの ENAG 社から 2002 年に出版された版については情報を得ていなかったらしい。実際、この英語版の序文で掲げられているフェラウーン作品をめぐる書誌情報はきわめて詳細でいかにも完全を期したものであるにもかかわらず、ENAG 版の存在は触れられていない。

初版のかたちにもとづいてこの作品を研究しようとするときに先行研究として非常に参考になるのは、ENAG2002 年版とスィユ版（1954 年の『貧者の息子』および選文集『記念日』におさめられた削除部分）のテキストを詳細に比較したマルチヌ・マチュー＝ジョブの研究書『ムールード・フェランの『貧者の息子』——ある古典の創出』（2007 年）<sup>91</sup>である。本論文は、『貧者の息子』の「偽りのシンプルさ」pseudo-simplicitéを超えて、とりわけ復元されたオリジナルテキストにみられるこの作品の「新しさ」nouveauと「奇妙さ」étrangetéに目を向けようとする彼女の姿勢に深く共鳴するものである。マチュー＝ジョブは、ロベール・エルバズとの共著である前著『ムールード・フェラウーン——ある文学の誕生』（2001 年）<sup>92</sup>で、フェラウーンの文学を単純素朴で無邪気な、そしてヨーロッパ人に追従する基本姿勢をもったものと捉えるそれまでの固定観念を覆して、彼の作品群全体を新たな「文学」の誕生を意味するものとして見直そうとした。ここですでに『貧者の息子』のテキストがはらむ画期的な「複雑さ」についての分析が着手されていたが、2007 年の『貧者の息子』論では、より詳しくテキストが含むさまざまな矛盾した要素や語りの複雑さが検討されている。この作品が作者の素朴な告白としての単なる自伝小説ではないこと、文学的創作意図に満ちた構築物であること、種々の「ハイブリッド性」がテキストの特徴となっていることなどについて、本論文はマチュー＝ジョブの研究によって確信を得ることができた。その上に立ってさらに以下の議論では、この作品が“意外にも複雑である”という次元を超えていった何を我々に提示しようとしているのか、我々読者がこの作品から得ることのできる新たなヴィジョンとはどのようなものであるのかについて、具体的なテキスト分析を通じて少しでも明らかにしていきたい。

なお残念ながら今日まで、1950 年に刊行された『貧者の息子』初版は手にすることができないでいる。ENAG 社からのオリジナル版（2006 年の再版本）<sup>93</sup>と英語訳を比べてみたところ、若干の異同はあるものの、ほとんど変わりがなない。本論文では、ENAG2002 年版および英訳版に基づき、これをこの作品の本来のかたちを示すものとみなしつつ、その上で適宜スィユ版を参照しながら、この作品について論じて行くこととする<sup>94</sup>。



#### 4. 反語的テキストとしての『貧者の息子』——カビリアの造型

この作品については作者の自伝的な小説である一方で、カビリア地方独特の文化や生活を紹介する民族誌的記述に溢れたノスタルジックな作品であることがしばしば強調される。とりわけマグレブ文学研究の大御所ジャン・デジュー Jean Déjeux が、1940年代後半から1950年代に豊穡な生産をみたマグレブ文学の潮流を「民族誌的」な文学（une littérature dite « ethnographique »）と捉え、そのもっとも代表的な作品としてフェラウーンの『貧者の息子』を位置づけたことが大きい<sup>95</sup>。彼は「フォークロア的、地方主義的」（folkloriques et régionalistes）なテーマをこれらの作品の特徴として挙げたが、こうした形容詞がその後、フェラウーンの文学を語る場合に欠かせないキーワードとして広く定着してきた。

たしかにこの作品では、カビリアの山岳地方特有の村の構造や住居の作り、伝統的な親族の系譜関係や村の組織と人間関係、民族工芸である陶芸と織物、イチジクやオリーブの栽培などの農業や牧畜の営みなど、さらには性にまつわる習俗などが、みごとに整理されながら詳細に紹介されている<sup>96</sup>。しかし一方でこの小説が、カビリアを閉じた空間としてではなく、外に開かれた空間として最初から提示し、またこの“内部世界”と外部世界とを主人公が絶えず往復するかたちで物語が語られていることに本論文では注意したい。この作品における「郷土」カビリアの造型を分析することは、この作品独特の複眼的・多価的なヴィジョン、それをテキスト化する際に現れる強烈な反語性を抉出することになるだろう。

##### 1) テキストの特徴としての反転世界

作品冒頭でカビリアが旅行者の訪れる場所として描かれていることに、まず着目したい。序章にあたる第Ⅰ部の第1章のあとに続くいわば小説内容の冒頭にあたる第2章の書き出しは以下のようなものである

カビリアの奥深くまで足を延ばす観光客は、みずからそう思うのか思うことになっているのか、いずれにせよあちこちの名所を訪れては素晴らしいと感じ、景色を眺めては風光明媚だと心を打たれ、そこに暮らす私たちの風俗にきまって理解ある共感を傾ける。

何の不思議もないことである。観光客というものはどこに行ってもこれと同じ共感を持つものなのだから。あちこちで感じるのと同じことをカピリアで感じない道理はない。

次々と訪れる観光客たちに文句はつけまい。観光客として訪れるからこそ素晴らしい名所だとか風光明媚な自然だとかを見出すのである。こうした夢は自分のところに戻ればおしまいになり、敷居を一步跨げば平凡な日々が待っているものだ。

私たちカピリア人は、私たちの邦を人々が称えてくれるのももっともだと思っている。私たちにお世辞混じりの褒め言葉だけを言ってこの土地の荒々しさについては伏せておいてくれるのも、なかなか良いものだ并接受取っている。しかしながら、どんなにお気楽な人でもまた風景に詩情などまったく求めない人でも、私たちの貧しい村々を目にすればひどいところだという印象がよぎらないではないことを、私たちは十分に想像できる。

ティズィは住民二千人の村である。〔後略〕<sup>97</sup>

そしてこれに続いて村の構造について（斜面にどのように家が立ち並び、道が延び、広場が作られているかなど）の説明がなされる。

興味深いのは、このテキストがカピリアに対する外からの視線を先に提示していることである。カピリア地方は閉じられた空間として設定されてはいない。テキストはカピリアを外部からまなざされる場として位置づけ、まずその外からの視線を受け止め、その上ではじめて内部からの見方で村の姿を提示しようとするのである。

またここではすでに、カピリアを特別な性質をもつ特異な場所として設定する見方と、どこにでもある場所の一つとみなす立場とが、交代しながら示されていることを特徴として挙げることができる。テキストによれば、観光客が訪れるのはここが特別な趣向に富んだ場所だからであり、一方それは観光というルーティーン化された行為に回収され得る場所だからである。ほかの「どこに行っても」同じ感動を与えてくれる任意の類例の一つとして、観光地としてのカピリアがある。こうして観光客にもてはやされる他とは違う独特の場所としてカピリアを浮かび上がらせた途端に、テキストは、世界中のどんな場所とも結局は大差のないものとしてこの土地を位置づける。何度かの屈折した論法、対立する二つの捉え方の並行的な提示をおこなった上で、ようやくこれから、住民にとってのかけがえのない場としてこの土地を描いていくのである。

こうしためぐるしい観点の反転の連続、多重的な視線によって、この土地は冒頭からさまざまな二項対立の両極をはらんだ空間となる。内側への閉鎖と外部世界への開かれ、特異性と普遍性、独自の価値と取るに足りない凡庸さ（「ひどい（つまらない・無意味な）」insignifiant 印象）。このテキストそのものが絶えず裏返しの運動をはらんで展開することが、すでにここでははっきりと示されていると言ってよいだろう。

このテキストがカビリアを、甘い回想の彼方にあるノスタルジックな空間と位置づけてはいないことにとりわけ注意しておきたい。同時代（20世紀前半から半ばにかけて）の視点においてこの地方はまなざされ、外部世界と連動しながら息づいているアクチュアルな場としてのカビリアが示されている。テキストがまず提示しているのは現代社会の一部をなすものとしてのカビリアなのである。

クリスティアーヌ・アシュールは、1930年（フランスによるアルジェリアの植民地化百周年の年）から1950年までに書かれたカビリアをめぐる植民者系の書き手たちの文章、とりわけ旅行ガイドの記述を『貧者の息子』のこのくだりが利用していることを検証し、そこに含まれていた外部からの侮蔑的なまなざしとはちょうど反対に、内部からの、愛情に満ちた、そして押しつけられた固定観念を突き崩すような描写をフェラウンがおこなっていたと論じている<sup>98</sup>。まさに『貧者の息子』のカビリア記述は「歴史」の中に、カビリアをめぐる言説の抗争の中に生きているのである。ただ本論文では、圧倒的に強力で抑圧的な外部からの（植民者側からの）視点に対抗するために内部からの（被植民者側の）視点を提示することによって、カビリアをめぐる言説の「対位法」を出現させたと捉えるアシュールの意見とはややニュアンスを変えて、外部の見方に対して内部の見方をぶつけて対抗するためではなく、テキストそのものを異なる旋律が並行する対位法的な文学空間として出現させることそれ自体がこのテキストの目的であると同時に出発点であったと考えたい。この世界の中では、反転し合う複数の観点は、すでにして対等のものとして位置づけられているのである。

さきの引用では、観光旅行に出かけてくる人々（西欧現代文明の中にいる人々）と訪れられる土地に住んでいる人々（カビリア人）を相同的なもの、等価なものともみなす視点がはっきりと示されている。地元の人間にとってことさらもてはやすべきでもないものを、あえて面白がり、持ち上げ、またそれを表明したがる来訪者たちと、それを受けるカビリア人とは、上下関係にもなけれ

ば、対称的な存在でもない。ただ出会ったときの役割が違うだけの相補的で交換可能な存在である。誰しも自分の居場所では凡庸さのなかに生きるほかはない。この条件は万人に共通である。

フェラウーンの文章には複数の視点を同時に成立させる、多重的な意味を担わされた言葉がしばしばあらわれる。たとえばさきの *insignifiant* は、「ひどい」という意味でカピリアの生活レベルの低さ・貧しさを示すと同時に、カピリアを訪れる人々から見たこの土地の価値のなさやこの土地へ向ける軽蔑的なまなざし（「つまらない」）とさらには無関心（「意味がない」）とを表し、さらに他方では、外来者たちのこの反応を当然のこととして受け止め、むしろ人間一般の日常生活の普遍的な凡庸さとその退屈な穏やかさを泰然と肯定するような意味合いをもつだろう（「特別な意味はない、ごく普通である」）。そして何より、たえず反転的な意識を喚起するこのテキストの運動に感染することによって、読者は、この貧しく取るに足りない（*insignifiant*）土地で生きていく者にとって、この貧しさそのものが、そして平凡な日々そのものが決して意味のない（*insignifiant*）ものではありえないことを逆説的に念頭に刻むことになる。意味のなさや、無尽蔵の意味をはらむ。この反語性こそこの作品を貫く一つの原理である。

『貧者の息子』は貧しさを売り物にし肯定した作品として「貧困賛美（悲慘主義、お涙ちょうだい）」*misérabiliste* の作品とも称されるが、本論文ではこの作品を貧困そのもののを美化した小説ではなく、無が有であること（同時に有が無でもある）、あらゆる価値の反転と相補的関係のなかに人間的なありようがあることを示したテキストとして読み解きたい。言い換えれば、いわゆるポストモダンの思想や、デリダの脱構築的な思考法<sup>99</sup>と近似したヴィジョンがこのテキストを貫いていると本論文ではみている。

## 2) 閉鎖性と開放性——内部と外部の切断と連鎖

カピリアが住民を温かく包みこむ一つの繭のように、あるいは人々を縛りつけ閉じ込める硬直した殻のように描かれることはたしかである。しかしながら一方でカピリア地方を、あるいは作中の故郷の村ティズィを、外部と接続する開かれた空間として提示する姿勢が作品のなかで強固に守り抜かれていることにも注意したい。この二つの様相が常に並行的に存在し、この内部空間と外部世界との対比と、主人公やその他の人物によるそのあいだの行き来があるからこそ、カピリアを描くことが現代文学としての意味をもってくる。

フェラウン文学の全体にわたる特徴であるが、カピリアの村はフランスへの出稼ぎ者を送り出す場所として描かれる。作品冒頭部第Ⅰ部第2章のなかでも、村の住居の紹介のくだりで、「いくつかの見栄えのよい住まいはフランスから持ち帰った金で最近建てられた」<sup>100</sup>との説明がなされている。(屋根の瓦の色が赤すぎたり、白い壁が目立ちすぎたりで、周囲と溶け込まないとしながら、すぐにテキストは中に入れば他の家と変わりが無いことを強調し、一つの段落の中で差異と同一性とが同時に示されている。反転的叙述はここにも顕著である)。

叔母ナナの悲劇を語る第Ⅰ部第10章では、この若く美しい叔母はオマルという男性と結婚したが、彼はその二週間後にはフランスへ発ってしまったこと、しばらくしてようやく戻ってきたものの実母との折り合いが悪く、結局再びフランスに行かせることになったことが説明されている。残ったナナは妊娠しており、そして悲劇が起こる。不在の夫が腹の中に残した子供と一緒に亡くなってしまうのである。移民労働のテーマが、不在者の存在という典型的に反語的なヴィジョンのなかに据えられていることを読みとることができる。

第Ⅱ部第2章ではフルルの家庭がいよいよ困窮して、父のラムダンがフランスに出稼ぎに行くことになる<sup>101</sup>。その間、フルルは高等小学校へ進むための奨学金給付試験を受けるが、その作文課題は、フランスに出稼ぎに行った父親がよこす手紙を想像して書け、というものだった(第3章)。フルルにはまさにこの課題はうってつけだった<sup>102</sup>。彼は容易に想像することができた。文字というものが読めず、フランス語のまったくできない父親が、買い物をするとき、仕事を探すとき、職場で上司の指図を受けるとき、あるいはたとえばパリの地下鉄や道で迷ったとき、どんなに困惑し、つらい経験をするか……<sup>103</sup>。フルルはつぶさに、自分では行ったこともないフランスでの父の生活を想像する。おそらく毎日想像してきたのだ。カピリアに暮らす者の精神はカピリアの内部にのみ留まっているのではない。

第Ⅱ部第4章ではフランスで大怪我をしたおかげでその補償として大金を手にするようになった父が1年半ぶりに戻ってくる顛末が描かれるが<sup>104</sup>、この第2章から第4章にかけてカピリアとフランスとのあいだで多くの手紙のやり取りがおこなわれ、また、フランスと行き来するほかの村人づてに父親からのお金が届けられたり情報が伝えられたりする。とりわけ父の事故の報を受けて村から急遽安否を尋ねる電報が打たれ、それに答える返信もフランス人から届く。こうした事情は現実のとおりでもあろうが、小説内でカピリアの村は

たえず外と、とりわけ遠く離れたフランス本土と、すなわち主人公フルルにとって現実のものでもあるが架空の空間でもあるような未知の世界と、同時代的につながり、交信している。

小説のなかではほかにも、フルルの上の姉バヤの夫がフランスに行ったまま帰らなくなってしまったこと、次の姉ティティの夫は12年もフランスで過ごしたことがある（それなのに何をしてきたのか、何を身につけたのかさっぱりわかないうえ貧乏なまま帰郷した）男性であることなどの、往復者のエピソードが語られる。フルルも学業に不安を覚えるたびに、故郷で羊飼いになる選択肢を逃れるようにフランスの工場でも働いてみたら、と想像する。特徴的なのは、外部の象徴であるフランスという場が言及されるのは、高等小学校に通っていたティズィ＝ウズや、高等師範学校に通うアルジェにおいてではなく、きまって故郷の村のなかに主人公が身を置いているときだということである。遠い想像上の世界は、自分の足元の地においてこそ伸び広がるのである。

第Ⅲ部「戦争」はまさに外からの情報、すなわちヨーロッパでの大戦勃発のニュースがカピリアに到来するところから始まる。

九月のある霧深い朝、戦争が勃発したが、カピリア人は誰も驚かなかった。<sup>105</sup>

このあとの説明は例の通り反語に満ちていて奇妙である。みなは戦争を待っていたという。待ち望んでいたとまではいわないまでも、としてテキストが説明するのは、カピリアではあまりにも平和な日々が続いたので、「変化が必要だった〔／起こらないないわけにいなかった〕」からだという。平和が長く続きすぎた。カピリアの人々はそのことに十分苦しんできた。「大きな災いには、それに応じた治療法を」。倉にも店にも物がいっぱい。往来は活気に満ち、欲しいものも欲しくないものも何でも手に入ってしまう。だからみんな不幸で、こんなことは長く続くはずがない。そしてその治療法は戦争しかない……<sup>106</sup>。いったいカピリアの人々は不幸だったから戦争を望んだのか、幸福すぎたから戦争を予期したのか。

いずれにしてもヨーロッパ中を巻き込んだ、そしてフランスが直接参戦することになったこの戦争という事態が生じ、アルジェリアの片田舎のカピリアの村もまさに現代史の中を生きることになる。世界情勢と連動して人々が一喜一憂し、物資の流れが変わり、生活が大きな影響を受ける。これは今に限ったこ



とでなく、昔からそうであったのである。村には「14年」（第一次世界大戦）を知っている人もいれば、「70年」（普仏戦争）を知っている老人さえいる。カピリアは世界史から切り離されて存在してきたのではない。

村人たちが、ドイツがフランスを占領したことを喜んだのもつかの間、彼らの生活にそれは直接、手ひどいかたちで跳ね返ってくる。もう本土に出稼ぎに行けなくなってしまい、職を失うことになったのだ。パリもリヨンもサン＝テチエンヌも一挙に、村人たちにとって訪れることの不可能な、隔絶された世界になってしまう。そしてじきにフランスから出稼ぎ者たちや徴兵にとられていた人々が大量して戻ってくる。もともと人口の多かったカピリアの村は人であふれかえり、そして食糧難の時代がやってくる。やがて飢饉となり、カピリアはどん底の時代を迎える。わずかな配給にしがみついて生き延びる生活。狂乱物価。餓死者の続出。さらにはチフスの流行……。

カピリアというこの一見閉じた世界が単に外とつながっているだけでなく、外からくるものに左右され支配されてさえいることに、テキストは鮮明な意識を向けている。大戦勃発の報が届いた朝について、すでにテキストはこう書いていた。

だからその朝、めいめい〔の村人たち〕は心軽やかに生イチジクをかじりながら、頭に色々な算段を浮かべつつ別れていき、ご近所を訪ねてはこの事件のことを話し、ニュースをふりまき、別の物を仕入れた。すでにいろいろなニュースが届いていた。どこから来たのか、それは分からなかったが。さまざまな情報が一塊りになってやってきた。確乎たる、議論の余地なき、明白な、それでいて互いに矛盾しあう情報が。<sup>107</sup>

住民には制御不能な外部からの決定的な（「確乎たる、議論の余地なき、明白な」）影響にこの空間はさらされている。戦争の影響による人口爆発、食糧危機、それをいささかでも救うのは（この地ではほとんど生産することのできない）大麦の配給である。チフスがやってきて多くの死者が出る。そしてそれを鎮静化させるのもフランス人がもたらす（あるいは神の采配によってもたらされる）ワクチンである。数年後に起きる英米軍のアルジェリア上陸作戦以降のドイツ敗退という戦争のなりゆきもまた、住民にとってはニュースを受け止め見守ることしかできない歴史的展開である。

時代の大波にのみ込まれるという点では、カピリアの村も世界のあらゆる場

所と同じである。カピリアは世界そのものだ。

だがとくに第Ⅲ部の記述からは、一つの別の枠組みが素描されているのを見ることができる。すでに触れたようにカピリア地方を描きながら、アルジェリアに暮らす人々の共通経験があぶり出されているのである。戦争のなりゆきそのものは無論のこと、本土からの帰還者の急増とそれともなう食糧難、急激なインフレなどはアルジェリアの社会全体を大きくゆさぶった出来事であり、こうした事態はアルジェリアの現地民衆のフランス本土に対する敵対意識・独立意識に少なからぬ影響を与えたものである。第Ⅲ部は教師となったフル・メンラッドが特権的知識人として、自分とカピリアの村の人々との間の疎隔感に苦しむ姿を一貫して描いているが、一方でフルは<sup>108</sup> アルジェリア現地民の立場に立ち、その庶民の一人として思考をめぐらし憤慨を漏らしている。

文字の読めないカピリア人は決して読むことはないがヴィシー政府の新聞には、闇市は不道德だと述べてある。なんとという悪い冗談だ！ 豊かなミティージャ<sup>109</sup>を抱えている国の中で人々が餓死しているんだ。飢えている人々に向かって、早く死なないのが悪い〔／罪だ〕、と言いたいのか！<sup>110</sup>

村で例外的に新聞を読むことのできる特別な人間である教師メンラッドは、だからこ他の人々以上にカピリア人の現状を明確にそして強い憤りをもって把握する。彼の憤りはカピリア人すべての憤りを背負うものであるからこそ激しいものとなる。さらにそれは、より広い地域にわたる自分らの同胞たちの憤りを背負うものでもある。

もともとこのテキストには、カピリアの村があまりにも過酷な土地にあるため、作物と言ってもイチジクとオリーブぐらいしかできないことが述べられていたことを思い起こしたい<sup>111</sup>。穀物のほとんどは外からやってくる。大麦でさえもそうであり、なけなしの金で購入し大事に保存しておくのだ。カピリアはあまりにも貧しいがゆえに、もともと「自立」不可能な土地なのである。だから市が生活の中でも重要で、貧弱とはいえ物資の流通が絶えることがない。カピリアはより大きな社会の中での交流によってしか存続し得ない。ゆえに、閉鎖性や孤立性で有名なカピリアこそ、逆説的にも、ある場所を誰かが占有し、そこから生まれる富の恩恵を近隣者には行き届かないようにして篡奪するということに対する断固たる拒絶をまっ先に主張する沸点となる。そして、支配者側の台詞を想像的に案出しながら、アルジェリア現地民の誰もが共有しえるか

たちで植民地支配の「罪」péchéを鋭く逆照射した上の文章は、この作品がカビリア人のみを同胞として射程におさめたものでないことをよく表しているだろう。

しかしまた同時にこのテキストは、カビリア人をアルジェリアの全現地民と結びつけ、作品の空間をアルジェリア独立へと向かう民族運動の枠組みにのみ添わせるものではない。この作品には、フランス植民地支配に対する批判とともに、独立闘争の時代にフェラウンに寄せられた生ぬるい同化主義者との批判もあながち故なきことではないと思われるほど、フランスとの交流を喜ばしきものとして捉える姿勢が最後まで表明されている。戦争が終わりに近づいたこと、そしておそらく自分たちの最悪の経験もその峠を越えたことを感じ始めた村人たちについて、作品の結末近くで、テキストはこう記している。

今やカビリア人たちはたった一つのことしか考えていない、彼らがひたすら考えているのはいつか訪れる日のことだ。平和が戻ったら、まだ傷が癒えていなくても、切符を手にして彼らのノルマンディーへ、あるいは彼らのアルザスへ、彼らのサン＝テチエンヌへ、リヨンへ、パリへと向かう日のことだ。<sup>112</sup>

だがここに、アルジェリアがフランスに永久に従属することの肯定、アルジェリア現地民の自立性の否定を読みとるべきではないだろう。ここに示されているのはフランス「本国」に対する寄生でも同化でもなく、人が自分の故郷に限りない愛着を抱きながらも別の土地（それが過酷でみじめな経験を強いた土地であっても）にも自分の居場所を見出し、その両方を「自分の」場所として愛していくような生き方であると思われる。繰り返される所有形容詞「彼らの」leurは、所有や占有とは異なる仕方で結びうる対象との関係、他者との共有を排除せずにある対象にもちうる親近性を示しているのではないだろうか。人は自分の経験が積み重ねられた場所を自分にとっての大切な場所、すなわち自分の場所となしていく。それは土地に権利の境界線を引くことではなく、内と外を分けることでもなく、自分の場所をどこかに限定しあれかこれかを選ぶことでもない。

そのとき往復される複数の場所のあいだに優劣は存在しなくなる。作品の冒頭で、訪れる（おそらくは植民者系あるいは本土からの）観光旅行客と、観光客にまなざされる、しかも貧困のなかにいるカビリア人とのあいだに、相同性

と等価性を見出していたのと同じ認識がここにはある。上に引用したこの作品の末部の文章（「エピローグ」を除くテキスト本文の最後から二番目の段落からの引用であった）の直前には以下のようにくだりさえ見いだせる。

彼らは自分たちがこのところ経験してきて今も続いている悲慘がまるでもうおさまったかのように話す。自分たちの状況をフランス人たちの状況や、占領された国々や、爆撃を受けた国々の状況と比較してみる。難民となった人々、投獄された人々、収容所に送られた人々、銃殺された人々、拷問を受けた人々らの苦しみに思いを馳せる。こうした不幸は自分たちにふりかかってもおかしくなかったのだと考える。自分たちは妻や子供たちと引き裂かれることもなくすんだと振り返る。粗末だが我が家もそして自分も無傷だ。たしかに飢えは経験したが、血も凍るような恐怖にさらされることはなかった。神の御加護によってこれまで難を逃れることができたこと、そしてもうじきこの恐ろしい地獄から無事に抜け出すことができるだろうことをよくわかっている。<sup>113</sup>

まさに人類愛とも言うべき隣人精神がここには表されている。おそらくヨーロッパの人々がカピリアの人々の暮らしに思いを馳せることのほとんどない時代に、支配者と被支配者の対立も、人種の違いも宗教の違いも超えて、ここでカピリアの村人たちは、地球の上で同じ時代を生きる人間として、フランスのあるいはほかのヨーロッパの人々に憐憫の情を寄せている（s'apitoyer [上では「苦しみに思いを馳せる」と訳した]）。「彼ら」が思い描くのが、抽象的な国家体制や陣営ではなく、人間たち（「難民となった人々、投獄された人々、収容所に送られた人々、銃殺された人々、拷問を受けた人々」）であることにも注意したい。かくしてカピリアの人々は自分たちの境遇を受け入れ、自分たちの土地に居ながらにして、すなわち地域的 régional で地方的 local な存在でありながら、まさに同時に、世界市民の感覚を生きっていると、テキストは語っている。フェラウーン作品にみられる地方性は、こうした仕方ですぐに反語的に、普遍的な世界に結びついている。

フェラウーンはおそらく、中央ではなく地方に生きる人間こそ、安寧の中ではなく貧困の中にいる人間こそ、また（好むと好まざるとに関わらず）自分の場所というものを持っている人間こそ、その枠を超越した精神に開かれているものだと確信していたのであろう。テキストの最後にはカピリア人の「つつま

しい（しがない、貧しい）」humble 幸福の再建や、常に変わることのない「単純な」simple 心が言及されているが、この「つつましさ」こそ最高の高貴さにつながり、この「単純さ」こそ無限の複雑な葛藤と洗練と豊かさを同時に秘めていることが、意味されているであろう。

## 5. 『貧者の息子』の提示する間主体的な人間観

一つの世界を形成しながら外部にも開かれている空間、強烈な個別性をもちながらも閉じていない場というこの小説のカピリアに象徴されるあり方は、この作品の人間観にも共通している。むしろ、この作品は、個人・主体というもの新たな捉え方を提示する作品であると本論文では考えている。次には『貧者の息子』が自伝的小説、主人公の成長をたどる伝記的小説でありながら、一方で完結した個人というものを否定する反＝伝記的 anti-biographique な小説、間主体的な人間像を提示する小説であること検討してみたい。

### 1) 両価性

この小説で提示されている逆説的な主体像を検証するに先立って、ここまで見てきたとおりこの作品が反語性・逆説性に満ちた世界を形成していることを、人間描写に関しても確認しておきたい。テキストおよび語り手がカピリア地方の人々やフルルとその家族に向けるまなざしも、たえず背反する両極を含んでいる。このテキストではすべてのものが複眼的にまなざされ、両価性を与えられており、結果、あらゆる評価がその逆の意味をも反語的に呼び寄せることになるのである。

たとえばカピリア人は素朴で愛すべき人々として描かれると同時に、繰り返し彼らのあいだの嫉妬や悪意、ずるさや虚栄心、理不尽なふるまいや利己的な計算、さらには盗み合いまでもがテキストで言及されている。これは第Ⅰ部の回想による語りでも、第Ⅱ部以降の三人称による語りでも変わることがない。主人公にとって愛する村はそこから出ただけで歓喜に襲われるような一種の牢獄でもあり、幼い時の大家族だった家庭は近親者ゆえの愛情と憎しみが交錯する空間である。また無上の愛情で主人公を甘やかしてくれた無骨な父親は、他方では彼の勉学にほとんど無関心で少年の優秀さを褒めてくれることさえしてくれない無理解な人間である<sup>114</sup>。また父は無骨な正直者の典型だが、フルルが教職についた後は、執拗に生活費をねだるだけのがめつい人間になってしま

う（一方で孫を可愛がる好々爺でもある）。両親や姉妹といった家族や親族は彼にとって「重荷」*fardeau* であり、また妻をいじめる敵陣営でさえある<sup>115</sup>。村人たちは彼を尊敬すると同時に、除け者にもする。誰が敵で誰が味方か、誰が善人で誰が悪人か、一元的には決定できないように描写するのがこのテキストの基本姿勢であると言える<sup>116</sup>。

それは主人公自身についても例外ではない。主人公であるメンラッド家のフルルは、祖母と息子二人（主人公の伯父と父）、それぞれの妻（主人公の伯母と母）、そして女の子ばかりのその子供たち（主人公の従姉たちと姉たち）のなかに唯一の男の子として生まれてきたため徹底的に甘やかされる。そのためかフルルはやさしく穏かな性格で愛らしい子供だったという——「それほど私は気立てがよく愛らしかった」、あるいは「私の気立てのよさ」とテキストでは繰り返される<sup>117</sup>。しかしその反対のこともテキストには描写されている。周囲はフルルを極端に甘やかして、彼が自分の姉妹や従姉妹たちをめっちゃにたたいても男の子だからそれも大事と叱らず、大人たちの前で悪さをしてもらってちやほやする始末。かくして5歳のころには「私はすぐに自分の権利を濫用するように」なり、姉のティティに対して「たちまち暴君になった」<sup>118</sup>。主人公は果たして幼少期の自分を賛美しているのか、それとも批判的に提示しようとしているのか、はたまた周囲の甘やかしぶりを非難し自分には罪はなかったと言おうとしているのか。ところで「私の暴君ぶり」*ma tyrannie* は上の姉バヤにも向けられる。バヤは敢然と弟に対抗してくるのでこの暴君は泣くという手段に出る。「私は泣けば自分の望みどおりになることをたちまち学んだ。涙と叫びは私の最強の武器であった」<sup>119</sup>。（いかにもこの作品らしく逆説的な）なんとも情けない姑息な暴君である。この後も男の子らしく喧嘩することを強いる伯父に仕返しするべく、年長者からいじめられたときにはわざと泣いて伯父を奔走させたことが記されている。テキストではこのように随所で子供時代の自分を無邪気で純粋な少年として甘美なまなざしで回想する姿勢と、自身に距離を置き批判的なまなざしをもって自分の汚点を暴き出す姿勢とが交錯する。こうしてテキストはまさに自己矛盾した語りの場となる。テキスト自身がおのれの述べたことに異を唱え、たえずすでに述べられたことが裏返されて、ユーモアにも満ちた、信用できない語りを繰り返すのである。最終的にそこから浮かび上がるのは、人間の多面性であり、人間的事象の多価性であり、人間関係の多重性である。

また、このテキストが既成の価値観を転覆するような仕掛けを多く用いてい



ることにも注意しておきたい。ほとんど未開民族のように思われているカピリア人がもっている現代的な広い視野や成熟した寛容の精神についてはすでに述べた。ほかに、故郷の村が山の上にあり、またその内部でも斜面にそって家が建てられ下の方ほど井戸に近く上の方ほど不便な土地となるため、この世界では「上へ行く」ことは価値の下降を意味し、「下へ行く」ことは価値の上昇をおおむね含意する、という象徴の転倒が起きている（そしてこの二項対立的な価値の配分は、同時に逆の配置ともなっている——「上」は天国に近いような温かい神聖な場、「下」は雑多な世俗の場）。この上・下の象徴的価値の逆転を典型として、女性である祖母が絶対の権威者で大の男兄弟（フルルの伯父と父）が従属的な位置にあったことや、男の子であるフルルがひ弱で女の子が粘り強いフルルのいとこ関係などに示される男女をめぐる固定観念の逆転、信じられないほどの父親の優しさ（仕事場の昼食をフルルに譲ってくれたエピソード）が主人公に胸の張り裂けるような思いを抱かせること、カピリアの村では青少年時代の男女の奔放すぎる関係がむしろ貞節に満ちた人生の準備となることなど、多様な“さかさま”の発想がちりばめられている。

アルジェリアの学校教科書にこの作品の抜粋が用いられる際には触れないようにされてきた<sup>120</sup>という宣教師ランベールとその寮をめぐる記述はこの点で見落とすことができない<sup>121</sup>。育った環境からしてムスリムであるフルルが、イスラーム教と対立的な関係に置かれてきたキリスト教の施設で生活しその恩恵に浴するということがかなり重きをおいて描かれていることに、驚きやショックを感じる読者もいるかもしれないが、テキストはこれを主人公（たち）の自分の宗教への裏切りとも、別の宗教への鞍替えやおもねりとも描いていない。寮で課される日曜ごとのボーイスカウト活動は山育ちのフルルとアジュールにとっては「子供じみた」ものであるし、そのメンバーたちの人格は理想通りではないことをユーモアとアイロニーをこめて指摘しつつ、テキストは要するに「どんな道徳も非難すべきでない」と鷹揚に受け止める。同様に、夕べの信仰の時間にもきちんと参加はするが熱心ではなく、積極的にこの宗教を求めようとする姿勢はないものの、かといっていささかも批判的ではない（「彼らはプロテスタント教に少しも嫌悪は感じなかった。反対にそのうち、この宗教の単純でゆるいところが好きにもなってきた。旧訳聖書や新約聖書に精通するようになった。習い覚えたキリストを称える讃美歌を、自分たちだけのときでさえ、歌って楽しみもした。しばしば、心の中では、見慣れた祈り方どおりに祈っていたけれど。」<sup>122</sup>）。すべては勉強が優先で、こうしたことは関心の外だった

と突き放しながら、テキストは宗教に関してもみごとに相対的な姿勢を強調している。もともとこのテキストではイスラーム教に対してもある程度の（ときに皮肉な）距離が保たれていると思われるが、イスラーム教とキリスト教とを等価な関係に置き、自分の出自を大事にしながらも双方を視野に入れた生き方を肯定するテキストの姿勢は、まさに複眼的な世界観をあらわしている。プロテスタントの寮の中で深夜まで勉強して本につっぷした二人に、朝の祈りを呼びかけるムエジンの声が届く情景は、このテキストの両価的な価値観を象徴しているだろう。

## 2) 反転的・相互補完的關係としての「対」

このように、すべては反転的であり、また相互補完的である。こうしたヴィジョンがこの作品に多く出てくる「対」の人物たちによって強調されていることを指摘したい。フルルは幼少時代、近所のアクリ<sup>つ</sup>という少年とのみ仲が良かった。二人はまたとない「ペア」として緊密な関係で結ばれることになった<sup>123</sup>。そのきっかけは不明とされる——「いつ、どんな状況で私たちの友情が生まれたのだろうか？ 私にはわからない。」「私たちが仲の良かった理由は不明である」<sup>124</sup>。そして回想のテキストは幼い自分とアクリ少年との正反対の特質を列挙してこう結論づける。「私がアクリに憧れアクリを大好きになったのは、彼が私にないものをすべて持っていたからであった。彼もまた同じ理由から私に愛着を感じてくれたのだと思う」<sup>125</sup>。ここには端的に、このテキスト独特の人間観として、たがいに片割れであるような、相互補完的なあり方が称揚されるべきものとして提示されている。テキストはまさにこう語っている。「僕たちは完璧に支えあった〔／僕たちはあとうかぎりに相互補完的な関係にあった〕」*Nous nous complétions à souhait.* (p.28)。

ここでアクリ少年自身の曖昧な、相反的な性格づけについても確認しておきたい。それはいかにもこのテキストらしい両価性に満ちた記述によってなされている。彼は、家から一步外へ出るとひ弱なフルルをほかの乱暴な少年たちから守り、いつも喧嘩を買ってくれる、頼もしい腕白少年である。だが一方でアクリは「少女のようにかわいく」、「色白の、きゃしゃで端正な顔つき」だという。それでいて「手も足もやたらに大きい」<sup>126</sup>。こうした、普通考えて矛盾する特徴を無造作に一少年に与えてしまうこの作品の作者は、不用意であり、人物造型が下手なのだろうか。アクリ少年がはっきりとした印象を残さず、研究書でも彼に関するくだりがほとんど言及されないのは、読み手のこうした受け

取り方をおそらく反映しているのだと思われる。しかしながら本論文の見方では、こうした描写姿勢こそ、このテキストが最も意識を鋭敏に注いで堅持しているものにほかならないと思われる。「ペア」であるアクリ少年の両極的な特質を記述することによって、それと対応させて、フルル自身の両極的な性質をもテキストは強調する。彼は家族のなかでは暴君だったが外に出るとてんで情けなく、アクリに保護されるひ弱な子分となる。一方で想像力や趣味の点ではアクリよりフルルが勝っていて、家での遊びでは彼がリーダー役だ。フルルはアクリが作ったおもちゃをわざと壊す大胆な乱暴者でさえある。

両価性を備えた正反対の二人は、相補的であるばかりでなく、その位置をたえず、めまぐるしく交換する。小さな6つの段落が続く1ページ半の記述の中で、いったい何度、二人の上下関係が反転されるだろう。この二人が仲の良い、かけがえのない友人であるのは、二人の間に何の不一致もなく、何の優劣もないからではない。いつも対比があり、そのつど優位と劣位があって<sup>127</sup>、そしてそれが決して固定することなくたえず流動しているからなのである。「僕たちは一緒に〔／一緒にすることで〕世界に踏み出した」*Nous fîmes ensemble notre entrée dans le monde.* (p.28) とテキストは記す。人が世界に出て行くには、自立した個人を鍛え上げることではなくこうした相互補完的なペアを持つことが重要であると、そしてその連帯を固定した役割分担によってではなくたえず関係を変動させる動態的なものとして保つことがなにより重要だと、このテキストは言おうとしているのではないだろうか。

ほかにも実に多くの、対称性を強調したペアがこの作品には見出せる。父ラムダンと伯父ルニス、母のファトマと伯母のヘリマ。あるいは祖母のタサディットはその息子たち・嫁たちの一人一人と対照することができるだろう。フルルもまたある意味で家族のメンバーそれぞれと対比をなしている。そして、読者はもっとも典型的なペアの事例として、幼いフルルが愛してやまなかった二人の叔母ハルティとナナを挙げることができるにちがいない。ハルティは不器用で大雑把だがあっけらかんとした明るさを持った女性、ナナのほうは美人で芸術的なまでに手先が器用で細やかな神経をもった人物である。フルルの母の結婚時、母の両親はすでに亡くなっていたために、男兄弟がいず叔父たち親戚から食べ物にされかかった母の二人の妹たちは、フルル一家の住まいのそばに掘立小屋を立てて二人きりで暮らし始めたのである。そしてフルルはすぐ上の姉ティティとともに、幼い日々の多くをこの叔母たちのもとで過ごす。まさに彼女たちは黄金のペアで、対称的なのに仲がよく、互いの特徴を生かして焼き物

作りや毛糸の織物を作って暮らしている。器用で忍耐力もあるナナは焼き物作りと同様、長い夜にわたる機織りも得意であるが、ちょうどそれを補うようにハルティは夜のあいだにフルルを夢中にさせるさまざまな物語を語ってくれる特別な才能を持っている。互いの長所は短所であり、短所が長所につながる。そして異なった人物それぞれに異なった良さがあり、価値は決して一元的には定められない。

もう一つの例として、フルルが村を出てティズィ＝ウズの高等小学校に通った4年間、ルームメイトだったアジールに言及しておきたい。フルルは、無料で寄宿させてくれる慈善家ランベール牧師の寮をアジールに紹介してもらい、二人はここで高等小学校時代を一緒に過ごす。そしてまるで双子のようにいつも一緒に刻苦勉励を重ねる。アジールはフルルと同年齢で、フルルと同様に山中の貧しい家の出の少年であり、一足先に高等小学校に通い始めていたせいで色々とフルルを助けてくれる。このあくまでも「感じが良く」sympathique（分析して考えれば、「同一の感情をもつ」と解釈できる）、たえずフルルをそっと励ましてくれる少年は、しかしながら、なぜかこのテキスト内で強い印象を残さない。二人の間には対比がなく、補完的なつながりがないのである。シンパシーはあるが共通点ばかりで、絡み合いぶつかり合って反転し合うようなダイナミズムがまるでない。これではまるでフルルが一人で存在しているのと同じである。

年齢が増すにつれてフルルはしだいに自分と「対」をなす相棒を持てなくなる。それが彼にとっての成長の寂しさとなっていくのである。それでもティズィ＝ウズにはアジールがいた。夢のような理想の日々だったと回想されるアルジェの高等師範学校には、もはやフルルのパートナーとなりうる人物は誰もいない。これ以後、教師として村へ帰ってからのものである。妻とはたがいに愛を傾けあっているが互いの役割を絶えず交換し得るような反転的なペアの様相は現れようもない。主人公の成長にしたがってテキストは第Ⅱ部、第Ⅲ部と進むが、その内容量は極端に減少していく。第Ⅰ部「家族」は11章立てで85頁、第Ⅱ部「長男」は9章立てで63頁、そして第Ⅲ部「戦争」は4章立て15頁にすぎない。これはこのテキストが少年の日の回想に重きを置いているからというよりも、相互照射的・反転的・補完的な人間関係が、フルルの成長とともに減少していく過程としてみるができるかもしれない。そしてテキストは大人になるにつれて身近なペアを失っていく人間が、より抽象度の高い次元で新たな反転的ペアを、あらゆる場に、想像的に見出すことを求めているのかも

しれない。

### 3) 反 = 教養小説としての『貧者の息子』——「主人公」の確立と否定

『貧者の息子』が自己反転的なテキストであり、それが主人公像にも大きく関わっていることを上に論じたが、このテキストの提示する人間観についてさらに発展して考えたい。そもそもフルルは「主人公」であるのか。この作品はフルル少年の成長の物語あるいは彼を主人公とする「教養小説 Bildungsroman」(成長小説, 人間を打ち立てる小説)であるのか。この作品は教師となったメンラッドの生の記録=伝記小説 biographie であるのか<sup>128</sup>。

作品全体の序ないし導入の役割を果たす第Ⅰ部第1章では、第一文で「メンラッド、カピリアの片田舎の慎ましい学校教師」が言及される。そしてこの章のなかで彼がものを書くことを企てたこと、「自分自身についての物語を」物語ってみたいと思い、「自分の人生」は知ってもらふ価値があると考えたことが記されている。つまりこの作品はメンラッドなるカピリアの田舎教師の自伝として冒頭からテキスト自身によって既定されているのである。「彼はただこうした偉人たちと同じように自分の物語を語ってみたいと思ったのだ」「彼は自分の人生がひとに知ってもらふ価値がある、すくなくとも自分の子供たちや孫たちに知ってもらふ価値があると考えた。」<sup>129</sup>〔強調点引用者〕。

だがこの作品は、フルル・メンラッドを主人公とする自伝であるというみずからの宣言を、様々な点で裏切っている。

まず主人公が登場するのは第Ⅰ部の第4章になってからである。前二章を使って彼の故郷の村の構造や彼の父・伯父の兄弟については詳しい説明がなされているが、それと比べると彼の誕生はほぼ1行で語られ、それもすぐに彼が生まれた二月という月についてのカピリアの有名な言い伝えを提示することの方に主眼が移ってしまうような次第である。そして、すでにみたようにフルルの幼少期が語られるわけであるが、なんと主人公らしからぬ、ただ甘やかされて育った、なかば気立てのよい、なかばずるくもある、なかば活発で、なかば引っ込み思案の、どうにも性格づけのはっきりしない、全般にはややひ弱な、線の細い子供が浮かび上がるのみである。

フルルの性格づけがはっきりしないのは、テキストのほとんどが、彼自身のことではなく、彼の周囲の人々のことを語っているからであることにも注意したい。この作品を評する際にしばしば言及される民族誌的な記述部分以外のフルルの子供時代を描きだす箇所においても、実際、フルル自身についての記述

や、フルルの内心を伝える文章はきわめて少ない。フルルを甘やかす大人たちやそのために迷惑をこうむる姉妹や従姉妹たちの様子が第Ⅰ部第4章で記されていることはすでにみたが、この小説の主要部分をなす、フルルの少年時代をカバーするこの第Ⅰ部のなかで語られていくのは、母の妹たちである二人の叔母の生活ぶりや、祖母が亡くなって二家族が別れて住むようになる経緯、それから家族が陥っていく貧困状態、そして二人の叔母ナナとハルティをおそった悲劇である。フルルはまるでこれらのエピソードの周囲に配置された脇役であるかのようなのである。

とくに第5章で記されている大騒動では主人公ならざる主人公としてのフルルの位置づけが鮮明である。これは籠作りをしている男のそばにフルルがうっかり近寄りすぎてケガをしてしまったことから、この男の一族とフルルの一族とのあいだに起こった大喧嘩の顛末である。事が重大になってしまったのはフルルが成り行きでつい嘘をついてしまったからなのであるが、親族たちはフルルそっちのけで激しいぶつかり合いを展開する。対立はますますエスカレートしていくが、村の長老ほかのお歴々が仲介の労をとり、結局両家族はこの仲介者たちにごちそうをふるまったり礼金を渡したりとのたいへんな散財をする。こうして表面上は事が収まるがその後もずっと根深い反目関係が残ることになったという結末である。このエピソードのなかで、騒動の発端であるフルルは、ほとんど受動的な役割しか演じておらず、まるで存在していないも同然である。喧嘩が大人同士の家族間のものとなってからは、もはやフルルの出番はまったくない。

フルルの主人公性の希薄化はこの第Ⅰ部のもっとも印象的なエピソードである叔母のナナとハルティの悲劇でも明らかである。妊娠していたナナの不安については、子供であったフルルは母とナナの会話を脇で耳にしているもちんぷんかんぷんでよく理解できないし、出産を控えた晩は男の子であるフルルはとりわけ現場から遠ざけられていた。そして朝にはナナは亡くなっていたのである。またナナの死後、ショックを受けたハルティが正気を失ってしまおうと、フルルはほかの人々以上に、なすすべもなく啞然としているばかりであるし（ハルティとの特別に親密な関係が作品内ですでに物語られているので、フルルだけには可能な何らかの「活躍」を読者は期待したくなる場所であるが）、幼い少年であるフルルは雨の夜に谷間の方に疾走してしまったハルティを捜索する父や村の男たちの一団に加わることもできない。そしてハルティは永遠に帰ってこなかったのである。



少年期の回想録の主人公としてのフルルの像を希薄化させるさらにまた別の要因は、テキストがしばしば回想される主人公よりも回想する語り手の方を前景化することである。第Ⅰ部で採用されている一人称語りは、自然な自伝的回想を装いながら、むしろ読者が回想世界のなかに浸りきってしまうのを妨げることを目的としているように思われる。「いったいどんな状況で私たちの友情が生まれたのだろうか？ どうにもわからない。私の記憶の中では5、6歳の幼いフルルはすでにいつもアクリと一緒にいる」「界限を探索しきるのにどれくらいの時間が私たちに必要だったか私は覚えていない。」「私にはまるで昨日のここのように思い出されてくる。はじめて学校に行った日……」,「学校の最初の日がどうだったか、最初の一週間、あるいは最初の一年がどうだったかさえ、私の記憶にはほとんどなにも残っていない。思い出の中を探ってみてもはっきりしたことは何も分らない」<sup>130</sup>。ほかにも多くの例が見つけられるが、第Ⅰ部のテキストは回想する語り手の介入があざといほどに際立っていて、しかもその内容はほとんどが、よく思い出せないということ、記憶が不鮮明で断片的でしかないこと、記憶がないか混乱しているということである。

少年時代のエピソードのスムーズな再現を妨げるこうした介入は、第Ⅰ部の山場とも言えるナナの悲劇をめぐるくだりではとりわけ顕著になる。「私の思い出のフィルムの中では、このシーンは突然別のシーンに飛んでいる」<sup>131</sup>。さらには回想者の意図的な妨げさえもある——「ナナについて覚えている最後のイメージはほかのイメージと同様に鮮明なのだが私はあまりそれを思い出したくない」<sup>132</sup>。むしろテキストは回想主体にとってもっとも重要なことからこそ、自然な再現をできるだけ避けなくてはならない、という方針をとっているようだ。すなわち回想の物語は理屈の通った均質な流れであってはならない。そのことは次のようにはっきりと宣言されている。

少年時代の思い出は正確さも脈絡も欠いているものだ。いくつかの際立ったイメージだけが残されていて、思い起こすときに心の中でそれらをくっつけ合わすのだ。そうすることで、今ではもう消えてしまった世界の中になんとか入っていくことができるのである。ある過去の話全体を蘇らせるにはわずかなシーンがあるだけで十分である。理性というものはやたらに要求が高い。一貫性を求めるのだから。それに対して心は合理性を求めない。理屈の糸はすぐに混乱してわからなくなってしまうが、人は感じたことの記憶だけはしっかりと失わないでいるものだ。叔母たちのことを話す

ときにいつも私の導きとなるのは、ただ心だけである。

たとえば、私がくつきりと鮮明に覚えているのはこんな光景だ。<sup>133</sup>

この作品は、意図的に不自然な回想物語になるようにと狙い、主人公の過去のスムーズな再現であることを避けることによって成り立っているということがここに宣言されていると言ってよい。フルルの過ごした少年時代を彷彿と蘇らせることをこのテキストは拒否しているのである。

ここでもう一度考えてみなくてはならないのは、第Ⅰ部第1章で言われていた、メンラッドの「自分の物語」、「自分の人生」とはより正確には何を指しているかである。回想の運動が重視されている上記のいくつかの引用からも推察されるように、それは単に回想された内容としての彼の歩みではなく、それを回想することで深められる人生についての彼（回想主体）の省察、またその上に成り立つ今の教師としての自分のあり方ではないだろうか。ここで初版の副題にもう一度注意を払っておく必要がある。この作品は“貧者の息子”（貧困の落とし子とも受け取れる）たる「メンラッド、カピリアの学校教師」の物語であって、フルル少年の物語とはされていないことを。むしろ初版では教師となったフルルの戦時下の日々までが描かれている。しかしこの作品で重要なのは描かれたこの人物の人生そのものではなく、ある人生について、あるいはある人物をめぐる他の人々のありようについて、回想し思考を傾けメタ的な距離をとりながら人間の生を俯瞰する、そういう立場に身を置く一人の人物の方ではないだろうか。この回想する主体は第Ⅰ部にのみ顕在しているのだから、スィユ版でも十分にテキストのこの特徴は示されていると言える。

この観点からすると、主人公は少年フルルではなく、回想するメンラッドということになる。あるいは回想するメンラッドと過去の自分やその周囲の人々とのあいだの時間を越えた関係こそが主題化されていると言える。しかしながらスィユ版では、回想されるフルル少年を追いかけるテキストとしての性格を際立たせるために、書き手である学校教師メンラッドを紹介する第Ⅰ部第1章をそれ以降の部分とは切り離してしまう。そしてこれを全文をイタリックにおいて差異化し、作品の「序」ないしは「粹物語」としての機能を持たせ、作品本体に対する周縁的な位置づけを与えている。だが初版ではこうした差別化はなされていなかった。書き手である教師メンラッドは、第2章以降も、小説内の“登場人物”であるのだ。

第Ⅱ部の冒頭部分についても多くを考えさせられる。叔母たちの死後弟が生

まれ唯一の男の子として特権的に甘やかされる立場にあったフルルが、今度は「兄」*frs aîné*として次第に一家の支えの役割を背負う立場になっていく過程を描くのがこの第Ⅱ部で、主人公が若手教師として働き始めた時代までを扱っている。特徴はこの第Ⅱ部では一人称語りの回想ではなく、フルルを三人称で名指す客観叙述の体裁がとられていることである。

第Ⅱ部の第1章冒頭は、この物語叙法の転換の理由を暗に示している。すなわち第Ⅰ部の終わりまでがメンラッド・フルルが大判学習帳に記した彼の物語で、彼は何度もそれを読み返しては自分の人生のなりたちを考えた、テキストは説明している。彼はそれ以上書き進めなかったが、子供時代からのこれまでの自分の歩みを覚えていたし、さまざまに思い返していた——。彼は筆を止めてしまったけれど……、と述べておいて、テキストはフルルに弟が生まれたことから語り始める。こうしていえば自然に、今度は匿名の語り手による叙述によってフルルの人生が紹介されていくことになる。これに対してスイユ版では第Ⅱ部にも「粹物語」の部分を設け、第Ⅱ部第1章の前に全文イタリック体で組んだ独立した1ページを立てて、三人称による物語叙法への転換に少しでも“合理性”をもたせるような説明を工夫している<sup>134</sup>。

一人称叙述から三人称叙述への転換を物語上どう合理化するかという問題よりも本論文にとって関心があるのは、なぜ第Ⅱ部以降は三人称叙述にすべきであったのか、その効果は何かである。これについても主人公像の確立と希薄化という背反する二つの要請、その均衡を目指した結果であると本論文では考えたい。

第Ⅱ部では第Ⅰ部と異なって、テキストの記述の中心はフルル個人の生活になっていく。フルルは次第に勉強で頭角を現し、次々と試験に合格して故郷の村を離れて勉学の道を進んでいく。まさに彼自身の人生をたどり始めるのだ。このときテキストは、いわばフルルに密着しすぎないように、せめて叙法の上で三人称を使用することで距離を保とうしているように思われる。学業の世界で成功していくフルルはこの作品のまぎれもない主人公であるのだが、叙述はむしろ冷やかかで、彼をヒーローとしたくはないかのようである。

第Ⅱ部の半ば、高等小学校に進学したあたりから主人公がメンラッドと姓で呼ばれる箇所が出てくることは、多くの読者に違和感を抱かせるに違いない。フルルという呼び方も維持されるものの、小説の途中で同一人物に対する呼称を変え、西洋の小説の慣習に逆らって主人公をファミリーネームで呼ぶこのやり方はいかにもぎこちない。その一方で家族などほかの登場人物たちは名で呼

ばれ続けるし、とりわけ、同一文中で主人公だけが姓を用いて「メンラッド」と呼ばれているケースは奇妙でさえある（たとえば高等小学校時代の初めの時期を描くくだりに以下のような例が見られる。「それでも彼は、山に残って羊飼いとなるほかはなかった幼馴染のアクリのことは思い返した。彼、メンラッドの方は、想像を超えたこの環境にこれから身を置いて自分を伸ばすことができるのだ」、「この温かい雰囲気の中でメンラッドと友人のアジールは猛勉強の四年間を送った」<sup>135</sup>）。テキストはあえて主人公を姓で呼ぶことによって、主人公がしだいに大人になり社会的な人格を獲得していくことを含意するとともに、読者と主人公のあいだに距離を置こうとしているように思われる。故郷の村を離れて進学した場面から「メンラッド」という呼称が出てくることは、これがティズィ＝ウズでの学校生活のなかで彼が呼ばれる時の名であったことを想像させる。「メンラッド君」となったフルルは、学校の名簿に機械的にその名がならぶ一生徒にすぎない。学業の世界で上昇するにつれて、主人公を特別ではない一個人として表わす方法にテキストは腐心しているように感じられる。

そこでこの作品でのフルルの学業の描き方に注意しておきたい。最初から教師となる行く末が明かされているこの主人公を、テキストはできるだけ、もともとは勉学に向いていない子供であったかのように描こうとしている点に注意したい。第Ⅰ部第7章で語られていたのは、7歳のある朝、学校に行くよう突然父親に命じられて「私」はびっくりしてせっかくのクスクス<sup>136</sup>を前にしているのに食欲も消し飛んでしまったという思い出である。フェラウーンをめぐる伝記的証言から推察しても、また、主人公がのちに高等師範に進むことを考えてみても、フルルがきわめて優秀な生徒であったことは想像に難くない。それどころかそれはほとんど自明である。否定すべからざる事実であるからこそ、テキストはフルルが学校で優秀であったことに何とか触れまいと務めるのである——「私の学校通いの最初の一日、最初の一週間、最初の一年については記憶がほとんど残っていない。思い出をひっかきまわしてみても無駄で、なにもはっきりしたことが浮かんでこない。」「私は自分ができの良い生徒だったか悪い生徒だったか、勉強が進んだかそうでなかったかを言おうとするとても困ってしまう。ただ学校の生徒でいるのは嫌でなかった」<sup>137</sup>。ほかにも回想者の「私」は、自分はただ先生にぶたれるのがいやで、あるいは友達からばかにされるのがいやで少しは勉強しただけだと、まるで言い訳でもするように述べる。そして、彼が勉学に目覚めたというあのエピソードが語られる。それは、

次のようなものである。

ある日学校が終わって夕方4時すぎまで友達とさんざん遊んだあと笛を吹きながら家に帰ってくると、戸口にいた父親に叱られる。そんなふうに遊んばかりいるから、勉強ができないんだ、先生がお前を進級させられないと言っていたのも当然だ、と。そこでフルルは、むしろこの父親の言葉から、先生が少しは自分のことを気にしてくれていたのだと勝手に想像して、急に勉強に励みだしたのだという。つまり勉強熱心になったのは偶然の誤解が原因だというわけである。

どうにかして頭の良さを目立たせないようにしようとするテキストの不自然な態度は、第Ⅱ部第1章で、フルル・メンラッドの人となりを作ってきたのは、その父親や偶然や彼の「粘り強さ」だと述べて「——頭の良さと言っても良いが——」と付記している箇所<sup>138</sup>にも読みとれる。フルルの卓越ぶりをできるだけ表現しまいとするテキストの姿勢を、まるで手の内を明かすように、テキスト自身がわざとひけらかしているようにも思われる。

ここにいわゆる教養小説とこの作品との違いを見ることができよう。『貧者の息子』ではむしろ個人的な資質によって成功すること、人並みすぐれた知性によって傑出した人物となることは良しとされていないのである。ふつう教養小説では、主人公の努力と才能によって主人公がついには頭角をあらわしていくものである。自分の力で道を切り拓き、狭い社会や古い環境から抜け出してより広い世界に羽ばたいていく。困難を乗り越え、他人のできない冒険を達成していく。しかしこの小説では、フルルの学業の才は否定はされていないがなるべく直接には描かないように配慮されている。第Ⅱ部では、初等教育資格試験の合格、奨学生試験の合格、ティズィ＝ウズでの高等小学校時代の猛勉強、高等師範学校での夢のような日々などが描かれるが、語られるエピソードは、たまたま出た問題がぴったり合っていたとか、毎日じゃがいもを食べながら奨学金を節約して実家にお金を送りながら苦学した様子とか<sup>139</sup>、高等師範で数学の試験の成績が悪くて落第しそうになったときに校長から呼ばれ、事情を訊かれて実家の困窮が心配で勉強が手につかないことを話したところ、ひそかに校長先生がいつか君が出世した時に返してくれればいいからとまとまったお金をくれたというエピソード（しかし校長はその後すぐに亡くなってしまったので永久にフルルはこの恩を返すことができなくなってしまった）などである。

代わりにフルルの勉強能力・優秀さが生き生きと描かれるのは、第Ⅱ部第2章で紹介される手紙の代読や代筆をめぐるエピソードである。フランスに出稼

ぎに行った父親から手紙が届きそれを家族のために読みあげる者が必要になる。手紙が来ると、家族の中でただ一人字が読めるフルルが小学校から帰ってくるのを皆が待ち受けている。そして、彼が封筒に手をかけて開けるのだ。だが最初は自信がなくて読むことができない。初等教育修了資格をきちんと取った村の「物知り」を呼んで来てみんなの前で「訳して」もらう（むろんカピリア語にである）。これなら自分もできそうだと確信したフルルは次からは自分で読もうと決める。返事を書くのはもっと大変だ。最初は他の人に頼んだ。彼はたいそう自信のない性質だったのだ。だが手紙で使う言い回しやきちんとした表現を一つ一つ覚えては、だんだん手紙を書けるようになっていく。学校の作文の時間に習った言い回しをそのまま使って、自分の近況を伝える。それはなんと誇らしいことだった。

このエピソードは、この小説のなかで主人公の勉学能力がもっとも輝かしいものとなるのはそれが彼個人のものとして役立つときにはなく、他の人のために、自分を含めた周囲の人々のために役立つときである、ということを示している。そしてまたこのことは、彼の「出世」が彼を家族から自立させるのではなく、むしろますます家族との関わりを太くする、もっと言えば、彼にのしかかる家族親族を養う責任を増大させることともつながっている。奨学金をもらうようになってからはたえずその一部は家族の生活費のために仕送りに当てられたし、成長するにつれ、親たちを含めて家族を養わなければならないという重圧が彼の肩に重くのしかかっていく。ちょうど家族は、彼が勉学の世界で上へと登っていくにつれて、ますます貧困のどん底に落ちて行く。フルルにとって成長することは自立することではなく、一層緊密に周囲の人々との切っても切れない関係を引き受けて行くことなのである。フルルが高等小学校に通っている間に父親は借金をどんどん重ねていってしまう。それは結局は、まだ若いフルルの肩に重くのしかかってくることになるのだ<sup>140</sup>。次第に家族中がフルルに期待をかけ、もうじきフルルが出世してお金を稼いでくれると勝手な胸算用を始めて安易に出費をするようになる（p.135）。高等師範の受験前には姉夫婦にさらに子供が増え、それは将来自分が担わなければならない負担の増大を意味していた<sup>141</sup>。彼にとってこうしたことはけっして喜ばしいことではなく、胸が潰れるような思いである。だが、だからといってこの重荷を捨て去ることはフルルの念頭にはまったくない。

こうしていわゆる近代的主体の確立とは別の仕方でもフルルは大人になっていく。彼の人生ないし彼の存在は、ちょうどカピリアという空間と同様に、ある



意味で閉じたものでありながら、ある意味で外部へと開かれたものである。学問を積むにつれ内面的な自我が形成されもするが、一方でフルルは彼を取り囲む家族やまわりの社会とは、しがらみと言ってもよい切り離せないつながりを保ち、そしてその両方のバランスを並行してとっていく。

こうした間主体的な主体像を提示するために、テキストは一個のそれ自体で完結した連続体としての人間像をフルルに与えないように配慮していると思われる。フルルの人生をたどった伝記的小説の様相を呈しながらも、奇妙なまでにこのテキストが連続性を欠き、フルルの人生が断片化されて、ほんのわずかなエピソードの散発的な集合としかされていないことは、閉じた輪郭を持つ主体という、小説の主人公としてイメージされやすい主体の概念をあえてずらすための方策であるように思われる。

たとえばテキストのなかでフルルは生まれるとすぐ5-6歳になっており、学校の通い始めと叔母たちの事件以外の日々がどうなっていたのかはほとんどわからない。ティズィ＝ウズでの高等小学校についても、入学時にプロテスタント牧師の寮に落ち着くところまでは詳しいが、学年が進むにつれての学校での日々はほとんど触れられていない。高等師範の3年間についても具体的なエピソードはさきに上げた校長の話ぐらいであとは3年間をそっくり総括したような説明しかなく、読者としては肩すかしをくらったかのようでさえある。結婚については一文ですまされており、妻が彼のほかの家族からいじめを受けて関係が紛糾し、結局フルルの夫婦が離れて住むことになったこと以外は記述がなく、日々の生活は不明である。子供もいつのまにかできているし、学校での教師生活も全く触れられていない。

そうしたなかで特異であるのは、すでに少し触れたように、共同体の一員としてフルルを描く第Ⅲ部の姿勢である。フルルはフランス語を使いこなし新聞も読むことのできる特別な存在で、だからこそ村の人々の相談役でもあり、またとりわけ戦争勃発後は親フランス派の人間としてドイツ軍の肩を持つ村の人々と立場を異にする。たしかに、村人の多くと彼の立場は違うのだが、テキストはフルルとカピリアの人々を隔絶したものとしてはいない。そしてすでに引用したように、この小説の本文末部である第Ⅲ部第4章は五段落にわたって「カピリアの人々」を主語に据えた文章で締めくくられている。フルル・メンラッドという個人もここに溶け込んでいる。それこそがこの人物のもっとも重要な既定だとあえて確認するように。

ここで第Ⅰ部の回想の記述では、文の主語としてしばしば「私たち」 nous

が用いられ、第Ⅱ部では彼と友人アジールあるいは家族のメンバーなどをまとめて「彼ら」ils, ないしは曖昧な主語 on (「私たち」「彼ら」などの代用となる) が用いられていたことにも注意したい。主人公はしばしば周囲の人物たちと融合したかたちで名指され、融合した主体をその都度出現させる。

主体を閉じたものと見なさず、個性を保ちながらもそれと同時に他者たちと通じ合うような間主体的な存在として浮かび上がらせるこのテキストのスタンスは、1954年のスイス版の第Ⅱ部冒頭に書き加えられた文章に見事に要約されている。ここでテキストは、フルル・メンラッドのことを第Ⅱ部以降で物語っていく超越的な語り手を提起しながら、フルルに向かって語りかけるようにしてこう記している。

おまえの人生は無数のほかの人生と似たものだが、それを語り手は、結局のところ、おまえならではの特徴を挙げながら物語っていくだろう。フルル、おまえがいまも志を抱えていること、お前がこれまで自分を築き上げてきたこと、そしてそうすることができなかったほかの人々をややもすると軽蔑しそうになってしまうこと。

そんなことをしたら間違っているぞ、フルル。なぜならお前はひとつの特殊事例でしかなく、人生の手本は、そうした人々の方が与えてくれるのだから。<sup>142</sup>

作品の主人公は他の無数の人々と似ているからこそ成り立つのであり、同時に特殊性をもっていなければならない。だが特殊だということは、「特殊事例」でしかないということでもあって、傑出した人物はむしろ一般の人々に学ぶべきなのである。優れた人は優れた人ではなく、優れていない人々は優れた特別な人に教えるを与えるという意味で優れた人よりも優れている。そしていずれにしても、あらゆる個別の人生が無数の他の人生と似通い、通じ合っている。

『貧者の息子』は貧しさのなかに生まれ育った名もなき一介の田舎教師を特別な主人公として据えながら、この人物をたぐいまれな傑出した個人として描き、またその一方でこの主人公の個別性を揺らがせて、周囲と通じ合い、また周囲に埋もれ、地上の無数の人々と結び合うような存在として描き出した。

徹底した反語性に満ちたテキストによって、曖昧だが柔軟で新しい空間と人間を創出した点に、この作品の今日的意義を見出すことができるのではないだろうか。

## おわりに

この「素朴な」テキストが、認識の変革に挑戦した哲学的な試みとしてあることは、「考え方にはいくつかのやり方がある」<sup>143</sup>という思考法や価値観の多元性を認める作品の末部に付された「エピローグ」のなかの言葉にみてとることができるだろう。しかもこうした極限にまで相対的で動的な、形而上的にきわめて複雑な世界観・人間観を、そのまま複雑なものとして読者に提示する道をこの作品は選ばない。「もしかしたらほんとうのところ、人間の実存は思っている以上にずっと単純なものかもしれない」<sup>144</sup>とテキストは語っている。一方で把握しがたいほど多層的で、決然として安定を欠き、たえざる揺動と、挑発的なまでに過剰な反語性のなかで関係論的な主体像・世界観を構築しながら、それをできうるかぎり「シンプル（単純）」simple な生の様相のもとに提示することが、この作品の奇跡的な偉業であるように思われる。

本論文ではオリジナルテキストのかたちをこの作品の本来の姿と考えると分析をおこなってきた。しかし、第Ⅱ部の途中までにとどめたスイユ版でも、注意すれば本論文で採りあげた特徴の多くは観察することができる。後進地域のなかでも遅れた田舎の、貧しい「原住民」の少年時代を回想した物語だという先入観が引き起こしてしまう盲目化の作用から抜け出しさえすれば、読者の目にも、テキストの随所にはらまれたこの作品のきわめて複雑なヴィジョンや文学的な挑戦のありようが飛び込んでくることだろう。

しかし故郷カピリアを内部への閉鎖と外部への開かれとを同時にかかえた反転空間として提示するこの作品の姿勢は、主人公がカピリア地方を出てアルジェに進学することや、その後にもう一度故郷に帰還するとともに世界大戦下でのカピリアの状況を描く後半部を含めたオリジナルテキストの全体を捉えなくては、明確には見えてこないであろう。また幼年時代の回顧を第Ⅰ部でおこないながら作品全体としてはそれを相対化するという自己否定的な姿勢も、まさに煩悶する主体として主人公が浮かび上がり、また主人公が主人公性を明確に失っていく第Ⅲ部までを通じて作品全体を視野に納めなくては、はっきりとは浮かび上がってこない。

フェラウーン自身が納得して改訂出版した1954年のスイユ版は、まさに『貧者の息子』をめぐる研究書で言われてきたようにフランス人読者・ヨーロッパ

パ人読者に向けた側面が大きく<sup>145</sup>、彼らにとっての「わかりやすさ」を付度して優先したきらいがある。しかしオリジナルテキストでは読者の常識におもねることよりも文学的な冒険の方が重んじられ、「個人」や「主体」という概念を覆すような輪郭の不鮮明な間主體的な人間のあり方が模索的に提示されていた。それは20世紀後半にポストモダン思想の名で喧伝された数々の「主体の解体」をめぐる議論と連動するものであり、しかもその提示をフェラウンはすんなりと読むことも可能であるような小説作品のなかでおこなっていたのである。

マグレブ文学はこれまで一般的に、過剰なまでに前衛的で過激な内容の作品か、そうでなければ素朴で単純な心温まる作品かに二分される傾向があった。この観点からみられる多くの秀作がアルジェリア文学にはあるが、いまだ研究は不十分である。日本では『貧者の息子』を含め古典的名作の紹介すら今後の課題であるが、文学の可能性を考え、また現代社会が必要とする新たな認識の手掛かりを得るためにも、アルジェリア文学の蓄積に目を向けて行きたい。

## 注

- 1 本論文は以下の口頭発表をもとにして大幅に議論を拡張したものである。Et-suko Aoyagi, “An Investigation of ‘Self’ in *The Poor Man’s Son* by Mouloud Feraoun: Literature and Inter-Subjectivity Today”, TJASSST11 (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology), November 12, 2011, at Hammamet (Tunisia). 報告論集はCD版およびオンライン (<http://www.tjassst11.rnrt.tn/index.php?choix=6>)。
- 2 本論文では作家名の日本語表記にあたって、アルジェリア人についてはアラビア語表記を参照して長音を付した(邦訳文献の紹介の場合には例外とする)。アルファベット表記は作家自身が用いている綴り(これにも揺れがある場合がある)ないしは一般的に流通している綴りを用いた。カピリアの地名の読みについては標準的なフランス語のスペルの読みにしたがったが、不正確な点が残っていると思われる。今後改めたい。
- 3 *Le Fils du pauvre; Menrad, instituteur Kabyle*, Le Puy (France) : Cahiers du nouvel humanisme, 1950.
- 4 部分的な訳が存在する。石浜裕子訳・解題「ムールード・フェラウン『貧者の息子』」,『言語社会』(一橋大学大学院言語社会研究科紀要)第4号,2009年,pp.313-330。1954年のスイス版を底本とし、六つの章を選び、印象的なくだりを抜粋訳したもの。
- 5 この論文ではヨーロッパ人植民者系の居住者以外のアルジェリア人を「現地民」と呼ぶことにする。フランス語の *autochtone* (もともとその土地の人,

外からやってきたのではない人、住民、旅行者に対する地元の人、などを意味する)を念頭に置いている。植民地時代に植民者側によって公的にも用いられていた *indigène* 「原住民」という語はいかにも「未開の」「遅れた」人々であることを含意する蔑視と差別をとまなう用語であり、本論文で使用するの是不適切と考えた。

- 6 筆者は以下の口頭発表でアルジェリア文学の簡単な概観を行ったことがある。“What will bring cultural and academic exchange between Algeria and Japan: In the context of the 21th century literature of the World”, The 1st Algero-Japan symposium, November 8, 2010, at USTHB (Université de Sciences et Technologie Houari Boumediene) in Alger (Algeria).
- 7 鶴戸聡「アラブ・フランコフォニーと越境の文学」, 土屋勝彦編『反響する文学』, 風媒社, 2011年, pp.19-59。またより簡潔なものであるが同氏による以下の紹介もある。「文学の旅——「アルジェリア文学」の形成史」, 私市正年編著『アルジェリアを知るための62章』明石書店, 2009年, pp.320-323。
- 8 フランス植民地時代の歴史については、日本語文献としては以下が詳細で参考になる。シャルル＝ロベール・アージュロン『アルジェリア近現代史』私市正年・中島節子訳, 白水社(クセジュ文庫), 2002年。
- 9 「ベルベル」は野蛮人を意味する「バルバロイ」というラテン語に由来する別称であり、人々は自らを呼ぶ時アマズィグという呼称を用いている(日本では多く「アマジグ」と表記)。これは「高貴な出自の人」「自由人」を意味する。複数形はイマズィゲンである。最近ではこの呼称が紹介されることも増えてきたが、本論文はこれまで一般に用いられ、また当事者たちもフランス語で話すときには通常用いている「ベルベル」という呼び方を暫定的に採用することとする。
- 10 チュニジアではイスラーム世界第4の聖地とされる中部のカイラワーン、およびザイトゥーナ大モスクと付属のマドラサ(イスラーム学問所)を擁するチュニス、アラブ＝イスラームの文化拠点として大きな役割を果たしてきた。モロッコはウマイヤ朝のアンダルシア文化・芸術を引き継ぐイスラーム文明の西の中心地として高い地位を保ち、フェスやマラケシュといった古都がその中核を担ってきた。
- 11 Cf. Christiane Achour, *Mouloud Feraoun: une voix en contrepoint*, Paris: Silex, 1986, p.23, note 23. アシュールはフェラウンやディーブの作品のアラビア語訳が存在するのだから、それを用いることを検討すべきだと提案していた。
- 12 1952年の『忘れられた丘』*La Colline oubliée* でデビュー。独立闘争期の抵抗運動を描く『阿片と鞭』*L'Opium et le bâton* (1965)〔邦訳、ムールード・マリ『阿片と鞭』菊池章一訳、河出書房新社, 1978年〕はアルジェとカピリア地方とを舞台にする作品で、アルジェリアでは映画化もされている(アラビア語映画)。フェラウンに比べるとより社会性の高い作品が目立つが、フェラウンなくしては彼の文学もあり得なかったと思われる。
- 13 『大きな家』*La Grande Maison* (1952) でデビュー。この作品を含めた『火災』*L'Incendie* (1954), 『織物業』*Le Métier à tisser* (1957) と続く初期三部作で20世紀半ば近くのアルジェリアの地方都市や農村を鋭い社会意識によって描

き、大作家の地位を確立。その後も晩年まで、自らの枠組みをたえず超えるようにして40作以上の作品を書き、文学的な挑戦を続けた偉大な文学者である。邦訳には以下のものがあるが、ディープの作品としては比較的名度の劣る作品である。ムハンマッド・ディブ『アフリカの夏』篠田浩一郎・中島弘二訳、河出書房新社、1978年。短編にムハンマッド・ディブ「呪文」、野間宏編『現代アラブ文学選』創樹社、1974年初収。主要作品の翻訳が待たれる。

- 14 邦訳、カテブ・ヤシーヌ『ネジュマ』島田尚一訳、現代企画室、1994年。
- 15 小説のほかとくに詩作によっても広く影響を与えたマーレク・ハッダード Malek Haddad (1927-1978) も忘れてはならないだろう。ほかに、ヨーロッパ系ではあるが独立戦争には現地民側に立ち、独立後もアルジェリアに留まって活動を続けた作家としてジャン・セナック Jean Sénac (1926-1973)、ジャン・ペレグリ Jean Pélégri (1920-2003)、女性作家アンナ・グレキ Anna Greki (1931-1966) の存在は特筆しておくべきであろう。
- 16 1957年に『渴き』*La Soif*でデビュー。現在に至るまで旺盛な作家活動を行っている女性作家。2006年からフランス・アカデミー会員の座にある。邦訳にアシア・ジェパール『愛、ファンタジア』石川清子訳、みすず書房、2011年、および、『墓のない女』持田明子訳、藤原書店、2011年がある。
- 17 1965年にまず詩集を発表、『離縁』*La Répudiation*, 1969〔邦訳、ラシッド・ブージェドラ『離縁』福田育弘訳、国書刊行会、1998年〕で注目を浴びるが、その後も現在まで、詩・小説・戯曲・評論など多岐の分野にわたって実に多彩な作家活動を旺盛に展開し続けている。アラビア語での作品もある。
- 18 アムネスティ・インターナショナルの副代表でもあったが活躍のさなかに病没した。作品の質は非常に高く数々の文学賞を受賞、世界でもっとも評価されているアルジェリア作家とも言われる。
- 19 人道主義的・自由主義的な思想をもつジャーナリストでもあったが、イスラーム過激派によって暗殺され、その衝撃的な悲報が世界を驚かせた。
- 20 短い抄訳だが邦訳がある。鶴戸聡「〈原典翻訳〉ラバハ・ベルアムリ『傷ついた眼差し』(一)」、『イスラーム世界研究』第3巻第1号、2009年、pp.451-452。
- 21 この「恐怖」の時代の文学を総括した評論・紹介として、アルジェリアで広く信頼を得ている以下の著作は大変参考になる。Rachid Mokhtari, *La Graphie de l'horreur : Essai sur la littérature algérienne (1990-2000)*, Alger : Chihab Éditions, 2002。
- 22 アブデルハミード・ベンハッドウーガを嚆矢として、ターハル・ワッタール、ザフル・ウニーシーなど。
- 23 邦訳に、ヤスミナ・カドラ『カブールの燕たち』香川由利子訳、早川書房、2007年、『テロル』藤本優子訳、早川書房、2007年、『昼が夜に負うもの』藤本優子訳、早川書房、2009年。
- 24 この「新世代」の文学の動向を概観した著作として以下のものが有益である。Rachid Mokhtari, *Le Nouveau souffle du roman algérien : Essai sur la littérature des années 2000*, Alger : Chihab Éditions, 2006。前著の好評を受けて出された



もの。巻末に前著と同様に作家たちへのインタビューを載せるほか、作品からの抜粋が付されているのは、後に本文で述べるように、一般読者にとって書籍の入手が容易ではない事情を考慮したものであろう。

- 25 第1作は『ユダヤ人嫌いのカガイユ』 *Cagayous anti-juif*, 1899 で、これがいきなり大成功を収める。ひょうきんで憎めない主人公はユダヤ系の読者にも親しみをもたれたという。作品はビラや小冊子、あるいは新聞等への掲載のかたちで発表され、それが本にまとめられるようになる。最終作は『毛深いカガイユ』 *Cagayous poilu*, 1920。
- 26 邦訳された小説には、第二次大戦中にドイツの峡谷地帯への攻撃をおこなったフランス人航空兵を描いた以下の作品がある。ジュール・ロワ『幸福の谷間』金子博訳、新潮社、1955年（原作 *La Vallée heureuse*, Gallimard, 1946）。ほかにもロワの著書『アルジェリア戦争——私は証言する』（鈴木道彦訳、岩波新書、1961年）が訳されている。独立前のアルジェリアでの植民者文学に対して、日本で、ある程度関心が寄せられていたこと、またアルジェリア戦争の実情がまず植民者系住民経由で伝えられたことが、こうした翻訳動向からもわかる。  
 なお、徴兵されたフランス人青年が、アルジェリアの独立を支持する姿勢から、アルジェリア派遣前に軍を脱走するまでを描いた小説『脱走兵』（Maurienne, *Le Déserteur*, Les Éditions de Minuit, 1960）が、詳細な解説や資料をつけて、ただちに日本に翻訳紹介された（モリアンヌ『祖国に反逆する——アルジェリア革命とフランス青年』淡徳三郎訳、三一書房、1960年）。フランスでは刊行直後に発禁とされた作品で、モリアンヌは筆名。作者はアルザスの教師だった人物（本名 Jean-Louis Hurst）で、この作品は彼自身をモデルとし、フランスのアルジェリア政策についてのさまざまな矛盾が描出されている。
- 27 代表作の一つであるコルシカを舞台にした恋愛小説『それを暁と呼ぶ』 *Cela s'appelle l'aurore*, Seuil, 1952（ルイス・ブニュエルによって1955年に映画化もされた）は以下の邦訳題名で日本に紹介されている。エマニュエル・ロブレス『イヴはこゝにいる』品田一良訳、新潮社、1956年。
- 28 Jean Amrouche, *Chants berbères de Kabylie*, 1946; Marie-Louise Taos Amrouche, *Jacinthe noire*, 1947。なお二人の兄妹の母親の回想記（Fadhma Aït Mansour Amrouche, *Histoire de ma vie*, 1968）が邦訳されている。ファドマ・アムルシュ『カピリアの女たち』中島和子訳、水声社、2005年。
- 29 Cf. Christiane Achour, *op.cit.*, chap. II « Kabylies textuelles (1930-1950) ».
- 30 『貧者の息子』の冒頭で、書き手の野心は、モンテーニュやルソーやドーデやディケンズに倣うことであると表明されているし、この作品のエピグラフに用いられているのは、チェーホフ、ルソー（スイス社から出された改訂版ではミシュレ）、エレディア [José-Maria de Heredia (1842-1905)、キューバ出身のフランス詩人]、カミュである。
- 31 Jack Gleyze, *Mouloud Feraoun*, L'Harmattan, 1990.
- 32 以下の辞書のフェラウンの項目は詳細で参考になった。「Feraoun», in François Pouillon (dir.), *Dictionnaire des orientalistes de langue française*, Paris:

- Karthala, 2008, p.381-383 (signé par Michèle Sellès).
- 33 当時はフォール・ナショナル Fort National 混合共同体という行政区。
- 34 ベニ・ドゥラ (Beni Douala と表記) 地区はティズィ＝ウズの南方の山や谷が織りなす地域。なお、フェラウンが教師として赴任したタブドリスト村の下方 (西側) には現在では Taksebt ダム湖が大きく広がっている。
- 35 ロブレス宛て、1953 年 1 月 5 日付の書簡 (*Lettres à ses amis*, pp.89-91)。1953 年 3 月ごろにスイユ社から再刊予定だった『貧者の息子』の出版予告のために、著者みずからの伝記情報を編集者側に提供したものと思われる。
- 36 Tahar Djaout, « Présence de Féraoun », revue *Tiddukla*, n°14, été 1992.  
[http://www.ziane-online.com/tahar\\_djaout/presence\\_de\\_feraoun.htm](http://www.ziane-online.com/tahar_djaout/presence_de_feraoun.htm)
- 37 長じて教員となったさきの友人によると、フェラウンは親が無収入であったために奨学金の全額付与の資格を得たとのこと。しかしこの友人の方は部分支給の資格しか得られなかったので進学をあきらめたという。
- 38 『貧者の息子』のスイユ版の中では *collège* と表現されている通り、現在の日本の中学 = 高校に相当すると考えてよい。
- 39 École normale d'instituteurs [de Bouzaréah]. アルジェ市の郊外地域のブーザレア地区にあるためこの場所の名で呼ばれることもある。現在も、人文系高等師範学校 École normale supérieure des lettres et sciences humaines とし、同じ場所に存在している。
- 40 アシュール・シュルフィによるアルジェリア作家事典のフェラウンの項目ではティズィ＝ウズの高等小学校入学が 1923 年とされている (Achour Cheurfi, *Écrivains algériens; Dictionnaire biographique*, Alger : Casbah Éditions, 2004, p.165)。高等師範学校入学前に 1 年間の準備期間があったことはグレーズの著作でしか確認できなかった (Jack Gleyze, *op.cit.*, p.14)。マルチヌ・マチュー＝ジョブは、すでに 1931 年に師範学校入試の合格を果たしていたが入学したのは 32 年であるとしている (Martine Mathieu-Job, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun ou la fabrication d'un classique*, L'Harmattan, 2007, p.170)。
- 41 ロブレスは 1938 年に処女小説を発表し作家として早くから活躍する。彼の活動は当然、フェラウンにも刺激を与えたであろう。
- 42 Christiane Achour, *op.cit.*, p.95. 同じ情報が以下にも再録されている。« Repères biographiques », in *Journal: 1955-1962* (ouvrage présenté par Christiane Achour), Alger: ENAG, 2006, p.441.
- 43 1934 年、フェラウンは原住民法に基づく「くじ引き」によって兵役を逃れた。その後、第二次大戦でも召集されることはなかった。フェラウンはこの純然たる「幸運」についてさまざまに思いを馳せている。
- 44 グレーズは 1938 年としているが、これは誤りであると思われる。
- 45 4 人の娘と 3 人の息子 (アリー Ali, モクラン Mokrane, ラシード Rachid)。末の子が生まれたのは 1954 年 4 月。『貧者の息子』がスイユ社から再刊行された直後である。
- 46 また 1955 年 12 月にもパリを再訪している。このとき、同郷の人々から、彼の作品が同化主義的であるとの批判を強く受けたという回想が、クリスチアー

ス・アシュールによって紹介されている (Christiane Achour, « Présentation », in Mouloud Feraoun, *Journal 1955-1962*, Alger : ENAG, 2006, p.5.)

- 47 「補習課程」は小学校を終えたが上級学校 (高等小学校, 中学) には進まない生徒の学習の場。
- 48 故郷の村から次第に遠く離れるこうした経験をフェラウンは「追放」のように感じていたという。
- 49 社会教育センター (Centres Sociaux Éducatifs d'Algérie) はアルジェリア独立戦争中の 1955 年にユネスコの援助のもと, 現地民への教育普及のためにアルジェリアの各地に作られた, フランスの教育省に属する機関。アルジェリア現地民の文化とりわけベルベルの文化に理解のあったフランス人女性民族学者ジェルメヌ・ティヨン Germaine Tillion の主導によって創設された。アラビア語とフランス語による基礎教育および職業教育を目的とし, さまざまな啓発活動・教育活動を組織した (識字教育, 農業指導, 保健・衛生の教化運動など)。創設後ただちにフランス軍部や植民地領有支持派からは反体制分子の牙城として敵視される。とりわけ現地民の開化を望まない OAS からは脅迫の対象となる。

フェラウンが勤務していたのはアルジェ近郊地区エル＝ビアルにあった「シャトー＝ロワイヤル・センター」。
- 50 フェラウンらは, この日の会議で, 独立後のアルジェリアでの教育の普及, フランス語教育のあり方などのプランを協議していた。息子アリーの回想によれば, 遺体安置所で面会した父親の身体には 12 発の銃弾が撃ち込まれていたという。参考: HP « Assassinat de Château-Royal », [http://fr.wikipedia.org/wiki/Assassinat\\_de\\_Ch%C3%A2teau-Royal](http://fr.wikipedia.org/wiki/Assassinat_de_Ch%C3%A2teau-Royal)
- 51 アルジェリアのベルベル人およびカビリア地方については, 日本語文献では以下が参照しやすい。私市正年編著『アルジェリアを知るための 62 章』明石書店, 2009 年 (第 3 章「アルジェリアの民族構成——アラブとベルベル」, 第 24 章「カビール問題とは何なのか? ——その神話と現実」)。
- 52 カビリア語はアラビア語の属するセム語とは別系統の言語であるが, 語彙的にはアラビア語の影響がかなり見られる。なおカビリア語を含むベルベル語 (アマジグ語) には固有の文字があるが, 20 世紀後半の民族言語復活運動が展開される前は日常ほとんど使用されていず, 存在していないに等しかった。したがってカビリア語は 20 世紀前半には文字をもたない口頭言語としてのみあったと言ってよい。ベルベル語の研究者であったムールード・マムリーに代表されるように, 20 世紀半ば以降, ベルベル語の研究と復権が進み, 書記法も次第に整えられた。2002 年には憲法でベルベル語が国語として認定され, 2003 年以降, 学校教育に取り入れられ始めた。
- 53 1953 年 1 月 5 日付ロブレス宛ての書簡。
- 54 カーテブは, フランス語の学校に通わされることになったときの経験を, 「狼の口」に吞まれるような恐怖として語っていた。
- 55 日本でこれまでおこなわれてきたマグレブ文学についての紹介は, この「引き裂かれ」の問題に焦点を当てることで展開されてきたと言える。福田育弘「マグレブの熱い視線——マグレブの新しい作家たち」月刊『ふらんす』(白水社),

1993年4月号～1994年3月号, 同「テキストの暴力——マグレブの文学を読む」(白水社), 1995年4月号～1996年3月号, 澤田直「マグレブのフランス語文学——裏切りと歓待」, 三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店, 1997年所収。

56 総ページ数は206頁。

57 マグレブ文学についての充実した情報サイト Limag の記述によれば売れ残った残部はシャルロ社が買い取り, 1951年と52年に同社の Rivages 叢書の一冊として再販したという (Michel Puche の情報による), <http://www.limag.refer.org/Volumes/FeraounLivres.PDF>。この本を現在購入しようとしてもフランスや欧米諸国の古書市場ないし稀購本市場にもまったく情報がなく, おそらくフランス本土ではほとんど出回らなかったものと思われる。またアルジェリアでも所蔵している図書館が見当たらず, 初版のテキストを現在入手あるいは閲覧することは極めて困難である。

58 受賞式は1952年4月5日。フェラウーンのスピーチのタイトルは「フランス学校への賛辞」(« L'hommage à l'école française »)。以下に巻末資料として採録されている。Christiane Achour, *Mouloud Feraoun*, pp.99-100. またさまざまな HP で参照することができる。

59 たとえば1951年には以下の文章を各雑誌に発表している。「L'instituteur du bled en Algérie», *Examens et Concours*, Paris, mai-juin 1951 [のちに『カピリアの日々』に収められる文章]; « Le désaccord », *Soleil*, Alger, n° 6; juin 1951; « Sur l'école Nord-africaine des lettres », *Afrique*, AEA, Alger, n° 241, juillet-septembre 1951; « Les potines », *Foyers ruraux*, Paris, n° 8, 1951; « Mœurs kabyles », *La vie au soleil*, Paris, septembre-octobre 1951. 総じて, カピリアを描く「地方作家」としての位置づけが濃い。

60 1951年5月27日付。この手紙を含め, カミュ宛ての4つの私的な手紙が、『友人への手紙』*Lettre à ses amis*の再版以降の版では, 巻末に添えられている。

61 抜粋ではあるが単行本としてのちに刊行された。Albert Camus, « Misère de la Kabylie », in *Actuelles III, Chroniques 1939-1958*, Gallimard, 1958; rééd. *Chroniques algériennes : 1939-1958*, coll. « folio », 2002.

62 « Lettre à Albert Camus », revue *Preuve* (Paris), n° 91, septembre 1958; repris comme « La source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus) », in *L'Anniversaire*, pp.35-44.

63 Paris : Seuil, 1953, 256 p.

64 ロブレスは1938年に処女小説『行動』*L'Action*を発表。その後も成功作が続き, 1947年にはアルジェで, 自ら文芸雑誌『鍛冶』*Forge*を創刊してヨーロッパ系および現地民の作家たち (ムハンマド・ディーブ, カーテブ・ヤーシーン, ジャン・セナック, モロッコの作家アフメド・セフリウィ Ahmed Séfirioui, カピリア人キリスト教徒でその後長くフランスで活躍することになるマーレク・ウアリー Malek Ouary など) の作品を世に送り出す。1951年にパリでスィユ社に「地中海」叢書を立ち上げるとロブレスは自作の短編集『目の死』*La Mort en face*を, 翌年には大ヒット作となった『それを暁と呼ぶ』(邦訳題名『イヴはこゝにいる』)を出している。生涯を通じて, 若手作家の発掘には

熱心であった。

- 65 Alger : Baconnier, 1954, 141p.
- 66 Paris : Seuil, 1957, 222p.
- 67 Paris : Les éditions de Minuit, 1960, 111p.
- 68 « La littérature algérienne », *Revue française*, Paris, 3<sup>e</sup> trimestre 1957, repris dans *L'Annuaire*.
- 69 さきに挙げた「Lettre à Camus」, *Preuves*, n°91, septembre 1958 のほか、以下も公刊されている。「Le dernier message」, *Preuves*, Paris, Congrès pour la liberté de la culture, n° 110, avril 1959; repris dans *L'Annuaire*, pp.45-52.
- 70 « Le voyage en Grèce », *Revue française*, mai 1962, repris dans *L'Annuaire*, pp.71-83.
- 71 Paris : Seuil, 1962, 349p.
- 72 *Journal 1955-1962 : Reflections on the French-Algerian War*, edited by James D. Le Sueur, translated by Mary Ellen Wolf and Claude Fouillade, Lincoln: University of Nebraska Press, 2000
- 73 *L'Ami fidèle* (série de 4 manuels scolaires). Cf. Christiane Achour, *op.cit.*, p.87.
- 74 *L'Annuaire*, Paris : Seuil, 1972, 143p. 未完の小説（未発表作品『記念日』のヴァリエーション）の一部のほか、随想・論考 7 点と、『貧者の息子』のスイス版でオリジナルテキストから削除された後半部分を載せている（ただしここでも元のテキストに対する削除や改変が散見される）。
- 75 *La Cité des roses*, Alger: Yamcom, 2007, 172p. この書物も入手が困難である。
- 76 「Kabyle.com」が行ったラシード・フェラウンに対するインタビュー(2007年3月6日)による。以下のHPを参照。「Rachid FERAOUN : « La Cité des Roses est le seul roman inédit qu'a laissé mon père »», <http://www.kabyle.com/archives/Rachid-FERAOUN-La-Cite-des-Roses.html>
- 77 Paris : Seuil, 1969, 205p.
- 78 *The Poor Man's Son: Menrad, Kabyle Schoolteacher*, translated by Lucy R. McNair, introduction by James D. Le Sueur, Charlottesville (US) & London: University of Virginia Press, 2005.
- 79 メンラッド・フルルとも作中で記されている（第Ⅱ部冒頭, p.99）。姓（家族名）を冒頭に置くのは、カーテブ・ヤーシーンの例にもあるように、アルジェリアの現地社会の慣習としてしばしばみられる。ちなみにアラブ世界ではもともと「姓」という習慣はなく、名前としては個人名しかなかった。そのため、植民地時代には、現地民がしばしば軽蔑を込めて SNP (sans nom patronymique「姓なし」) と呼ばれたという。歴史的には個人を特定するためには、個人名に地名を付したり、親の名を、場合によっては何代か遡って、付したりしてきた。西洋に倣って「姓」の制度ができてからは、祖先のうちの誰かの名を家名としてとったケースが多い。なおベルベル人の姓の頭に「アイト」Aït がついていることが多いが、これは of, from の意で「～家の」を示す。
- 80 1953年2月22日付エマニュエルの妻ポーレット・ロブレス宛ての手紙から。*Lettres à ses amis*, p.94.

- 81 友人・知人たちへの手紙の多くは整理されて『友人への手紙』のなかで公刊されているが、フェラウーン宛ての手紙が示されていないことやコンテキストの説明がないため、しばしばフェラウーンの書いた文面の意味が量りがたいのは残念である。
- 82 *Le Fils du pauvre*, Seuil, coll. « points », pp.145-146.
- 83 *L'Anniversaire*, p.103. フェラウーンのこの手紙は前後を含めて以下でも参照できる。 *Lettres à ses amis*, p.127.
- 84 Cf. Martine Mathieu-Job, *op.cit.*, p.17.
- 85 チュニジアで 2011 年 11 月に『貧者の息子』について口頭発表したところ、文学部の教授たちすべてからスィユ版がオリジナルではないとは知らなかった、あるいはこれから本論文で述べるように『貧者の息子』のテキストが複雑な性質を備えているとは全く考えたことがなかった、との反応を得た。
- 86 Christiane Achour, *op.cit.*, chap. I « Stratégie pour la nationalisation d'une œuvre ».
- 87 *Journal; 1955-1962*, Alger : ENAG, 2006, p.446.
- 88 国立教育院 (Institut Pédagogique National, 略称 IPN) は独立と同時に 1962 年に創設された。国の教育の内容や質の全般の責任を負い、教科書はこの機関のもとに一元的に作成されてきた。1996 年に IPN は国立教育研究院 Institut National de Recherche en Education (INRE) へ移行し、教科書は検定制となった。アルジェリアの教育制度と教科書については、以下の HP で大変詳しい情報を得ることができる « Le manuel scolaire; aspects économiques et sociaux », <http://www.cnes.dz/cnesdoc/Plein%2021/livrev.f.htm> なお、アルジェリアは独立以来一貫して教育に国家予算の 12% 以上 (1989 年には 20% 超) を傾注し、国家の基礎として重視してきた。
- 89 アルジェリアでは 6 歳から 15 歳までが義務教育で 1971 年以降はこれを一貫した基礎教育学校 École fondamentale でおこなっている。義務教育期間は 5-6 年間の初級と 4 年間の中級に分けられてきた。現在では 1 期・2 期・3 期と区分されている。高校は日本と同じく 3 年が基準。
- 90 1983 年以降は、二つの教科書でフェラウーンのテキストが掲載されていないという。これ自体が特筆すべきこととなっている。
- 91 Martine Mathieu-Job, *op.cit.*
- 92 Robert Elbaz et Martine Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun ou l'émergence d'une littérature*, Paris : Karthala, 2001. 貧者の息子を扱った章 (pp. 11-43) は「創始的な複雑さ」« La complexité fondatrice » と題されている。
- 93 この入手については小林正利氏と Safia Lamani 氏の御厚意に浴した。記して感謝を捧げる。
- 94 以下、『貧者の息子』からの引用は基本的に ENAG2002 年版 (2006 年の増刷版) による。この版からの出典表記はページ数のみを示すこととする。
- 95 Jean Déjeux, *Littérature Maghrébine de langue française*, Sherbrooke (Canada): Naaman, 1973. Cf. p.37 et *passim*.
- 96 カビリア地方についての民族誌的な情報がいかに効率的に小説の設定のなかで配置され、意図的な構成法を通じて提示されているかについてはマチュー＝



ジョブによる『貧者の息子』をめぐる研究書の第一部および第二部に詳しい (Martine Mathieu-Job, *op.cit.*)。

- 97 « Le touriste qui ose pénétrer au cœur de la Kabylie admire par conviction ou par devoir, des sites qu'il trouve merveilleux, des paysages qu'il se dit pleins de poésie et éprouve toujours une indulgente sympathie pour les mœurs des habitants.

On peut le croire sans difficultés, du moment qu'il retrouve n'importe où la même sympathie. Il n'y a aucune raison pour qu'on ne voit pas en Kabylie ce qu'on voit également un peu partout.

Mille pardons à tous les touristes passés et à venir. C'est parce que vous passez en touristes que vous trouvez ces merveilles et cette poésie à la nature. Votre rêve se termine à votre retour chez vous et la banalité vous attend sur le seuil.

Nous, Kabyle, nous comprenons qu'on loue notre pays. Nous aimons même qu'on nous cache sa vulgarité sous des qualificatifs flatteurs. Cependant, nous imaginons très bien l'impression insignifiante que laisse sur le visiteur le plus complaisant et le moins poète, la vue de nos pauvres villages.

Tizi est un village de deux mille habitants. [...] », p.9.

なおスイス版とのあいだには数々の表現上の異同がある (英語版とは、ほぼ同一内容である)。そのなかには pour qu'on ne voit が pour qu'on ne voie と文法上より正しい形に改められた語法上の訂正もあれば、第二段落冒頭の文章の後半部の拡張 (du moment qu'il retrouve n'importe où les mêmes merveilles, la même poésie et qu'il éprouve chaque fois la même sympathie.) のように文体上の変化もある。第5段落の冒頭が Tizi est une agglomération de deux mille habitants. に変えられたように、総じて、論理性を重んじ、またやや格調を高める方向で手が入れられたことがわかる。また他の部分ではより大きな改変や文章の削除もみられる。

- 98 アシュールはとりわけ、フォール・ナショナル混合共同体の行政官であった Martial Rémond の二つの著作 (*Au cœur du pays kabyle*, Alger : Bacconier, 1933; *Djurdjura, terre de contraste*, Alger : Bacconier, 1940) との関係进行分析している。前者は観光業界から賞を受けた旅行ガイド本、後者はより自由な逸話・短文集である。カビリア地方を「アルジェリアのスイス」と称揚したり、他方で何もかもが無い場所として見下したり、また男性をみじめな姿で女性を理想化して描くといった、数々の固定観念に縛られた偏りがあることをアシュールは紹介している。Cf. Christiane Achour, *op.cit.*, p.40sq.
- 99 いわゆる「ポストモダン」の思想は、とりわけ1970年代以降に欧米を中心に世界中を触発したが、矛盾に満ちた逆説的で難解な論理を特徴とする。そのなかでもジャック・デリダの「脱構築」の思想は、さまざまな二項対立概念を利用しながら、二項対立の前提となる価値観や概念の腑分けそのものを問い直した。「文学」概念そのものについてのデリダの発想については以下を参照のこと。青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』——文学と範例性』新曜社、

2009年。この著作で詳述した、特殊性と普遍性の共存という、デリダの主張する文学の特質はまさにフェラウーン作品にも顕著に見出すことができると本論文は考えている。

- 100 アシュールによれば「フランスから持ち帰った金で」という表現が、アルジェリアの教科書では削除されているという。ほかにもさまざまな「脱歴史化」のための削除がなされているという。Christiane Achour, *op.cit.*, p.24sq.
- 101 実際のフェラウーンの父親は、彼が生まれる以前の1910年からフランスにたびたび出稼ぎに行っていたという。その回数は生涯で20回に及んだとのことである (Cf. *Lettres à ses amis*, p.90)。作品では、主人公フルルにとっての父との初めての別離、父にとっての初めてのフランスへの出発が描かれることで、貧困ゆえの父親の移動、家族の二元生活の始まりが切実な緊迫感をもって演出されていると言える。
- 102 « La rédaction s'adressait exactement à lui », p.112.
- 103 p.113
- 104 幸福と不幸とが極端な反転関係をなしながら合体しているこの悲劇的かつ喜劇的なエピソードもまた、このテキストの特質を象徴的に示していることに注意したい。
- 105 « Lorsque la guerre éclata, par un matin brumeux du mois de septembre, elle ne surprit aucun Kabyle. », p.161.
- 106 « il fallait un changement. La paix avait trop duré. Les Kabyles en avaient assez de souffrir : « Aux grands maux, les grands remèdes » [...] on avait tout ce qu'on voulait et tout ce qu'on ne voulait pas. On était malheureux, ça ne pouvait durer. Et comme remède il n'y avait que la guerre. », p.161.
- 107 « Donc ce matin-là, chacun s'en alla manger ses figures fraîches le cœur léger, la tête pleine de projets, interpellant ses voisins pour parler de l'affaire, colportant une nouvelle, en apprenant une autre. Les nouvelles venaient déjà. D'où? on n'en savait rien. Elles arrivaient tout d'une pièce : solides, indiscutables, évidentes et contradictoires. », p.162.
- 108 テキストの記述は第Ⅲ部では基本的に超越的な匿名の語り手の立場からなされているが、このくだりの口語的・感情的な表現は、中心人物フルルの内言を写し取ったものであると感じられる。
- 109 アルジェ近郊の肥沃な農作地帯。植民者が手中に収めていた。
- 110 « Les journaux de Vichy, que les Kabyles ne lisent jamais parce qu'ils ne savent pas lire, disent que le marché noir est immoral. Quelle sinistre plaisanterie! Les gens crèvent de faim dans un pays qui possède la Mitidja et on leur dit qu'ils comettent un péché en ne crevant pas plus vite! », p.172.
- 111 以下の小論では、カビリア地方の生活におけるイチジクの重要性を通して、『貧者の息子』と『カビリアの日々』で描かれる食生活と民衆文化を検討した。Etsuko Aoyagi, "Importance of figs in the Kabyle life: In the first half of the 20th century in Algeria", *Establishment of Integrative Research Base by Humanities and Sciences on Valorization of Useful Plants for Regional Development in North Africa I* (『アジア・アフリカ学術基盤形成事業報告論文集——北アフリ

カの有用植物」I), ARENA, University of Tsukuba, March 2011, pp.5-8.

- 112 « A présent, ils ne pensent plus qu'à une chose, qu'à un jour. Le jour où, la paix revenue, ils prendront leur billet pour aller retrouver leur Normandie ou leur Alsace, leur Saint-Etienne, Lyon ou Paris, à peine guéris de leurs blessures. », p.176.
- 113 « Ils parlent de leur misère récente et actuelle comme si s'était fini [sic]. Ils comparent leur situation à celle des Français, des pays occupés ou bombardés. Ils s'apitoient sur le sort des réfugiés, des prisonniers, des déportés, des fusilés, des torturés... Ils songent qu'ils auraient pu connaître tous ces malheurs. Ils se disent qu'ils n'ont été séparés ni de leur femme, ni de leurs enfants. Leur gourbi est intact comme leur personne. Ils ont connu la faim mais ils n'ont pas connu l'épouvante. Ils reconnaissent qu'ils ont été épargnés par la Providence et qu'ils sortiront indemnes de cet effroyable enfer. », p.176.  
なおスイユ版では、「si s'était fini」は「si c'était fini」と修正されている(*L'Anniversaire*, coll. « points », p.136)。
- 114 勉学への期待のなさは、たえず主人公に、結局は村で羊飼いとなる、という将来像をオブセッションのように押し付けることにもなる。主人公はそれも良いと思ひもするのだが、そこからは何としても逃れたいという無意識の焦燥が掻き立てられているようである。
- 115 フルル夫妻がフルルの親きょうだいらと対立し、妻の側に立つフルルが親族に恩を返さない者として非難され、その敵対関係の末に夫妻が彼の実家を離れることになるくだりは、オリジナルテキストにはあるが、スイユ社の『記念日』に収録された補遺テキストからは削除されている。
- 116 あらゆる部分が多重的な意味をもっているとも言える反語性に満ちたこのテキストについては、表現やエピソードの「解釈」を決することはきわめて難しい。たとえばすでに本論文では、スイユ版の最後のシーンを、主人公が必至で不安を押さえながら、自分は大丈夫だと母親に伝えてくれ、と父親に頼む切ない場面と捉えたが、マチュー＝ジョブはこのシーンを全面的な幸福感と希望に満ちた歓喜の場面と捉えている(Martine Mathieu-Job, *op.cit.*, p.26)。
- 117 « tant j'étais doux et aimable », p.25; « ma douceur », p.29.
- 118 « j'abusai bientôt de mes droits »; « Je devins immédiatement un tyran », p.26.
- 119 « Je m'étais bien vite rendu compte qu'en pleurant je pouvais obtenir tout ce que je voulais. Les larmes et les cris étaient mon arme infaillible. », p.27.
- 120 Christiane Achour, *op.cit.*, p.25.
- 121 フェラウーンは実際、ティズィ＝ウズでは、ロラン Rolland 牧師の慈善施設の寮生であった。アルジェリアでは植民地時代から現在に至るまで、白衣宣教師 pères blancs と呼ばれるキリスト教布教者たちの献身的で友愛的な慈善活動が広く行われ、住民から一定の敬愛をもって迎えられてきた。
- 122 « Ils n'avaient aucune aversion pour la religion protestante. Au contraire, à la longue, il se prirent à l'aimer pour sa simplicité et son indulgence. Ils

connurent à fond le Bible et le Nouveau Testament. Ils prenaient plaisir à chanter, même seuls, les cantiques qu'ils avaient appris à la gloire du Crucifié. Souvent, dans le secret de leur cœur, ils prièrent comme ils virent prier. », p.132.

- 123 Cf. « Il y avait d'autres bambins, mais il ne se forma pas de paire d'amis comme la nôtre. », p.29.

- 124 « A quel moment et dans quelles circonstances naquit notre amitié? Je ne saurais le dire. »; « rien n'explique notre attachement », p.28.

- 125 « J'admiraïs et j'aimais Akli parce qu'il avait tout ce qui me manquait. Je suppose qu'il s'attacha à moi pour les mêmes raisons. », p.29.

- 126 « beau comme une fillette »; « son teint blanc, ses traits fins et réguliers »; « il avait les poings et les pieds trop grands », p.29.

- 127 第Ⅱ部第7章で、差別のない理想主義的な空気の支配する高等師範学校入学後の記述の中で、それまでの差別のある世界を振り返ったくだりは辛辣である。成長するにつれて、とりわけティズイ＝ウズの高等小学校に進学して、フルルは幼いときからのヨーロッパ人（「ルミ」les roumis〔ローマ人を意味する古くからのアラビア語圏での表現〕への恐怖を尊敬の念へと変えていったが、見かけだけは立派な彼らは人格もそうとは限らない。「小さな町のフランス人たちはお高くとまって冷たい。彼らは原住民を蔑む（それも時に当然と言えるのだが）。彼らはなんとしても特権的地位を守ろうとし他の人たちに目をやらない。フルルはまだ若くしてこうしたことを学んだ。そしてこの事実を受け止め、優れた者がいて劣った者を嫌うのは自然の法則なのだと思うに至った。先生たちだってあからさまにフランス人の生徒やほかの寮生を鼻屑した。彼は自分を劣った、嫌われるべき存在と見なさざるをえなかった。諦めてそうすることにした。」 « les Français des petites villes sont fiers et distants. Ils méprisent l'indigène — parfois avec raison — ils veulent à toute force former une caste à part et ne pas voir les autres. Fouroulou, encore jeune, s'est aperçu de ces choses. Il finit par les admettre et par croire qu'une loi naturelle veut qu'il y ait des supérieurs pour détester des inférieurs. Ses professeurs, eux-mêmes, favorisent ouvertement ses camarades français et certains internes. Il se vit obligé d'être inférieur et détestable. Il se résigna. », p.141. ここにはむろん差別に対する厳しい告発がなされているが、フェラウーンのテキストは一方的に片方の陣営だけを糾弾することはない。「原住民」の側にも蔑まれるだけの理由があることにも言及し、またフランス人たちが「より豊かで、より美しく、より賢く、より幸せで」、「たぶんより徳高い」（これは皮肉であるが）ことを認めている。そしてこうした記述の全体を通じて、「優れた者」がいかに醜く、「劣った者」の方がいかに高貴であるかという逆転が示されていることに注意したい。植民地支配による差別の告発よりも、人間にとって残念ながら普遍的に存在する「差別」というものを見据えた上で、その中においてたえず優位と劣位の反転をみようとする成熟した哲学をここに読みとることができる。そしてこの優位と劣位は、現実においても反転可能であることを、テキストはまさにこの作品の原理に則ってすでに主張して

いるように思われる。

- 128 マグレブ文学研究家ル＝ルズィックは『貧者の息子』および『日記』『友人への手紙』を取り上げて、これらのテキストが純粹に「自伝」であるのかそれとも「虚構」であるのかを問い、その曖昧さを指摘している (Maurice Le Rouzic, « Écritures autobiographiques chez Mouloud Feraoun », in Martine Mathieu *ed.*, *Littératures autobiographiques de la francophonie* (Actes du Colloque de Bordeaux, 21, 22 et 23 mai 1994), CELFA/L'Harmattan, 1994, pp.45-55)。本論文では作品が作者の現実を写し取った自伝であるかどうかを問う次元を離れて、フェラウンの文学がそもそも人間というものをどのように描き出そうとしているのかを問題としたい。
- 129 « Il voulait tout simplement, comme ces grands hommes, raconter sa propre histoire. »; « Il croyait que sa vie valait la peine d'être connue, tout au moins de ses enfants et de ses petits enfants », p.6.
- 130 « A quel moment et dans quelles circonstances naquit notre amitié? Je ne saurais le dire. Dans ma mémoire, le petit Fouroulou de cinq ou six ans est toujours escorté d'Akli. », p.28-29; « Je ne me rappelle pas combien de temps il nous fallut pour explorer le quartier. », p.29; « Je me souviens, comme si cela datait d'hier, de mon entrée à l'école », p.53; « Ma première journée de classe, ma première semaine et même ma première année ont laissé dans ma mémoire très peu de traces. J'ai beau fouiller parmi mes souvenirs, je ne retrouve rien de clair. », p.54.
- 131 « Dans les film de mes souvenirs, cette scène est suivie immédiatement d'une autre. », p.82.
- 132 « La dernière image qui me reste de Nana est aussi nette que les autres mais je n'aime pas l'évoquer souvent. », p.83.
- 133 « Les souvenirs d'enfance manquent de précision et de lien : on garde certaines images frappantes que le cœur peut toujours unir l'une à l'autre lorsqu'il les évoque, de sorte qu'il réussit quand même à se placer dans une ambiance qui n'est plus. Quelques tableaux lui suffisent pour revivre tout un passé. Il semble bien que la raison soit plus exigeante, elle veut du cohérent, tandis que le cœur ne se pique pas de logique. Mais si l'on perd facilement le fil de ses raisonnements, on conserve jalousement la mémoire de ses sentiments. C'est mon cœur uniquement qui m'inspire chaque fois que je parle de mes tantes.  
Voici, par exemple, une scène que je revois avec une grande netteté [...] », p.81.
- 134 *Le Fils du pauvre*, coll. « points », p.105.
- 135 « il se rappela, toutefois, son ami d'enfance Akli qui était resté à la montagne, irrémédiablement berger alors que lui, Menrad, allait vivre et évoluer dans ce milieu inimaginable. », p.130; « C'est dans cette demeure hospitalière que Menrad et son ami Azir passèrent quatre années de labeur ininterrompu », p.131.

- 136 クスクスは北アフリカ地方一帯で現在もよく食されるベルベル起源の代表的な郷土料理。セモリナ小麦粉〔非常に強い強力粉〕を細かい粒状にし、ふかして、野菜と肉や魚介類の入ったスープをかけて食べるのが現在では一般的。カピリア地方ではフェラウーンの時代、小麦粉は手の届かない高級食材で大麦のクスクスを食べるのがせいぜいだった。しかもわずかな野菜が入っただけか全く実のないスープをかけることが多く、場合によっては水をかけるだけのこともあったが、それでも、飢餓すれすれの食生活のなかでは贅沢であった。作品ではこの朝、フルル少年は、一人きりの朝食に牛乳をかけたクスクスを出してもらい、この贅沢を独占できるという望外の喜びに浸っていた。
- 137 « Ma première journée de classe, ma première semaine et même ma première année ont laissé dans ma mémoire très peu de traces. J'ai beau fouiller parmi mes souvenirs, je ne retrouve rien de clair. », p.54; « Je suis très embarrassé de dire si je fus bon ou mauvais élève, si j'appris beaucoup ou peu. Du moins, je n'éprouvai aucune répugnance à être écolier. », pp.54-55.
- 138 « sa tenacité — on peut dire par son intelligence — », p.99.
- 139 スイユ版では、ガリ勉の姿勢が行き過ぎて、ただ良い点が欲しいばかりに美しい抒情詩（ラマルチーヌの「湖」）を怒鳴るように暗唱してしまい、先生に叱られたという滑稽な逸話も語られている（第Ⅱ部第7章, coll. « points », p.144）。
- 140 Cf. « Il [=le père] [...] déposera le fardeau alourdi par ses soins sur les épaules toutes neuves de Fouroulou. », p.135.
- 141 「彼にはわかり始めていた。姪っ子たちはたしかに父親に頼るだろうが〔中略〕とりわけ叔父に頼ってくるようになるだろう」« Il commençait à comprendre: ses nièces peuvent très bien compter sur leur père [...] mais elles compteront [sic] surtout sur leur oncle. », p.137.
- 142 « Il racontera ta vie qui ressemble à des milliers d'autres vies avec, tout de même, ceci de particulier que tu es ambitieux, Fouroulou, que tu as pu t'élever et que tu serais tenté de mépriser un peu les autres, ceux qui ne l'ont pas pu.  
Tu aurais tort, Fouroulou, car tu n'es qu'un cas particulier et la leçon, ce sont ces gens-là qui la donnent. », Seuil, coll. « points », p.105.
- 143 « Il est plusieurs façons de raisonner », p.179.
- 144 « Peut-être qu'au fond l'existence est beaucoup plus simple qu'il ne croit. », p.178.
- 145 Cf. Jean Déjeux, *Littérature Maghrébine de langue française*, p.37.

### 【書誌一覧】

〈フェラウーン Mouloud Feraoun の著作〉

*Le Fils du pauvre; Menrad, instituteur Kabyle*, Le Puy : Cahiers du nouvel humanisme, 1950; *Le Fils du pauvre*, Seuil, 1954 (coll. « points »); *Le Fils du pauvre*;



*Menrad, instituteur Kabyle*, Alger: ENAG, 2002 (réed. 2006); 英訳 *The Poor Man's Son: Menrad, Kabyle Schoolteacher*, translated by Lucy R. McNair, introduction by James D. Le Sueur, Charlottesville (US) & London: University of Virginia Press, 2005; 1954年のスイス版で削除された部分は概ね以下に掲載された「Foulourou Menrad」, in *L'Anniversaire*, pp.103-141

*La Terre et le sang*, Paris : Seuil, 1953, 256p.

*Jours de Kabylie*, Alger : Baconnier, 1954, 141p.

*Les Chemins qui montent*, Paris : Seuil, 1957, 222p.

*Les Poèmes de Si Mohand*, Paris : Les Éditions de Minuit, 1960, 111p.

*Journal: 1955-1962*, Paris : Seuil, 1962, 349p. ; réed. (ouvrage présenté par Christiane Achour), Alger: ENAG, 2006; 英訳 *Journal 1955-1962: Reflections on the French-Algerian War*, edited by James D. Le Sueur, translated by Mary Ellen Wolf and Claude Fouillade, Lincoln: University of Nebraska Press, 2000

*Lettres à ses amis*, Paris : Seuil, 1969, 205p.

*L'Anniversaire*, Paris : Seuil, 1972, 143p.

*La Cité des roses*, Alger: Yamcom, 2007, 172p.

« Discours de Mouloud Feraoun lors de la remise du prix de la ville d'Alger » (le 5 avril 1952), *Journal des Instituteurs de l'Afrique du Nord*, n° 6, le 6 décembre 1952; repris dans Christiane Achour, *Mouloud Feraoun*, pp.99-100

« La littérature algérienne », *Revue française*, Paris, 3<sup>e</sup> trimestre 1957; repris dans *L'Anniversaire*, pp.55-58

« Lettre à Albert Camus », *Preuve*, Paris, Congrès pour la liberté de la culture, n° 91, septembre 1958; repris comme « La source de nos communs malheurs (lettre à Albert Camus) », in *L'Anniversaire*, pp.35-44

« Le dernier message », *Preuves*, Paris, Congrès pour la liberté de la culture, n° 110, avril 1959; repris dans *L'Anniversaire*, pp.45-52

« Le voyage en Grèce », *Revue française*, Paris, mai 1962; repris dans *L'Anniversaire*, pp.71-83

#### 〈アルジェリア文学作品の邦訳〉関連作品を含む。出版年順

ロワ (ジュール)『幸福の谷間』金子博訳, 新潮社, 1955年

ロブレス (エマニュエル)『イヴはこゝにいる』品田一良訳, 新潮社, 1956年

モリアンヌ『祖国に反逆する——アルジェリア革命とフランス青年』淡徳三郎訳, 三一書房, 1960年

ロワ (ジュール)『アルジェリア戦争——私は証言する』鈴木道彦訳, 岩波新書, 1961年

ディーブ (ムハンマッド)「呪文」, 野間宏編『現代アラブ文学選』創樹社, 1974年初収

マムリ (ムールード)『阿片と鞭』菊池章一訳, 河出書房新社, 1978年

ディーブ (ムハンマッド)『アフリカの夏』篠田浩一郎・中島弘二訳, 河出書房新社,

1978 年

- カテブ (ヤシーヌ) 『ネジュマ』 島田尚一訳, 現代企画室, 1994 年  
 ブージェドラ (ラシッド) 『離縁』 福田育弘訳, 国書刊行会, 1998 年  
 アムルシュ (ファドマ) 『カビリアの女たち』 中島和子訳, 水声社, 2005 年  
 カドラ (ヤスミナ) 『カプールの燕たち』 香川由利子訳, 早川書房, 2007 年  
 カドラ (ヤスミナ) 『テロル』 藤本優子訳, 早川書房, 2007 年  
 カドラ (ヤスミナ) 『昼が夜に負うもの』 藤本優子訳, 早川書房, 2009 年  
 ジェパール (アジア) 『愛, ファンタジア』 石川清子訳, みすず書房, 2011 年  
 ジェパール (アジア) 『墓のない女』 持田明子訳, 藤原書店, 2011 年  
 ほかに研究誌に掲載された抄訳として  
 石浜裕子訳・解題「ムールード・フェラウン『貧者の息子』」, 『言語社会』(一橋大学大学院言語社会研究科紀要) 第 4 号, 2009 年, pp.313-330  
 鶴戸聡「〈原典翻訳〉ラバハ・ベルアムリ『傷ついた眼差し』(一)」, 『イスラーム世界研究』 第 3 巻第 1 号, 2009 年, pp.451-452  
 ＊アルベル・カミュの著作については比較的良好に知られているので省略した。

#### 〈その他の参考文献〉

- Achour (Christiane), *Mouloud Feraoun: une voix en contrepoint*, Paris : Silex, 1986  
 Achour (Christiane), « Présentation », in Mouloud Feraoun, *Journal 1955-1962*, Alger : ENAG, 2006  
 Aoyagi (Etsuko), “Importance of figs in the Kabyle life: In the first half of the 20th century in Algeria”, *Establishment of Integrative Research Base by Humanities and Sciences on Valorization of Useful Plants for Regional Development in North Africa I* (『アジア・アフリカ学術基盤形成事業報告論文集——北アフリカの有用植物』 I), ARENA, University of Tsukuba, March 2011, pp.5-8  
 Aoyagi (Etsuko), “An Investigation of ‘Self’ in *The Poor Man’s Son* by Mouloud Feraoun: Literature and Inter-Subjectivity Today”, *Proceedings of TJASSST11* (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology), 11-13 November 2011, Hammamet (Tunisia), 2011 [CD 版およびオンライン版 (ページ数なし) <http://www.tjassst11.rnrt.tn/index.php?choix=6>]  
 Camus (Albert), « Misère de la Kabylie », in *Actuelles III : Chroniques 1939-1958*, Gallimard, 1958; rééd. *Chroniques algériennes : 1939-1958*, coll. « folio », 2002  
 Cheurfi (Achour), *Écrivains algériens; Dictionnaire biographique*, Alger : Casbah Éditions, 2004  
 Déjeux (Jean), *Littérature Maghrébine de langue française*, Sherbrooke (Canada): Naaman, 1973  
 Djaout (Tahar), « Présence de Feraoun », revue *Tiddukla*, n°14, été 1992  
[http://www.ziane-online.com/tahar\\_djaout/presence\\_de\\_feraoun.htm](http://www.ziane-online.com/tahar_djaout/presence_de_feraoun.htm)  
 Elbaz (Robert) & Mathieu-Job (Martine), *Mouloud Feraoun ou l’émergence d’une littérature*, Paris : Karthala, 2001  
 Gleyze (Jack), *Mouloud Feraoun*, Paris : L’Harmattan, 1990  
 Le Rouzic (Maurice), « Écritures autobiographiques chez Mouloud Feraoun », in

- Martine Mathieu ed., *Littératures autobiographiques de la francophonie* (Actes du Colloque de Bordeaux, 21, 22 et 23 mai 1994), CELFA/L'Harmattan, 1994, pp.45-55
- Mathieu-Job (Martine), *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraou ou la fabrication d'un classique*, Paris : L'Harmattan, 2007
- Mokhtari (Rachid), *La Graphie de l'horreur : Essai sur la littérature algérienne (1990-2000)*, Alger : Chihab Éditions, 2002
- Mokhtari (Rachid), *Le Nouveau souffle du roman algérien : Éssai sur la littérature des années 2000*, Alger : Chihab Éditions, 2006
- Pouillon (François) dir., *Dictionnaire des orientalistes de langue française*, Paris : Karthala, 2008
- 青柳悦子『デリダで読む『千夜一夜』——文学と範例性』新曜社, 2009年
- アージュロン(シャルル=ロベール)『アルジェリア近現代史』私市正年・中島節子訳, 白水社(クセジュ文庫), 2002年
- 鵜戸聡「文学の旅——「アルジェリア文学」の形成史」, 私市正年編著『アルジェリアを知るための62章』明石書店, 2009年, pp.320-323
- 鵜戸聡「アラブ・フランコフォニーと越境の文学」, 土屋勝彦編『反響する文学』, 風媒社, 2011年, pp.19-59
- 私市正年編著『アルジェリアを知るための62章』明石書店, 2009年
- 澤田直「マグレブのフランス語文学——裏切りと歓待」, 三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店, 1997年, pp.186-201
- 福田育弘「マグレブの熱い視線——マグレブの新しい作家たち」月刊『ふらんす』(白水社), 1993年4月号～1994年3月号
- 福田育弘「テキストの暴力——マグレブの文学を読む」月刊『ふらんす』(白水社), 1995年4月号～1996年3月号

\* 本論文は, 平成 22-25 年度文部科学省科学研究費基盤研究 (C) 「アルジェリアの現代文学状況」(代表・青柳悦子) の補助を受けた研究成果の一部である。